

# 雪柳

泉鏡花

青空文庫



小石川白山はくさんのあたりに家がある。小山弥作氏やさく、直槇ちよくしんは、筆者と同郷の出で、知人は渠かれを獅子屋ししやさんと渾名あだなした。誉過ほめすぎたのでもありません、軽く扱ったのでもありません。氏神の祭礼に、東京で各町内、侠勇きやういの御神輿おみこしを担ぐとおなじように、金沢は、廂ひさしを越すほどの幌ほろに、笛太鼓さみせん三味線はやしの囃子はやしを入れて、獅子を大練りに練って出ます。その獅子頭に、古来いわれが多い。あの町の獅子が出れば青空も雨となる。一いっぴようの風を捲まく。その町の獅子は日和を直す。が、まけるものか荒びは激しい、血を見なければ納まらなないと、それを矜ほこりとし名譽として、由緒ある宝物になっている。こういうのは、いずれ名ある仏師、木彫の達人の手になつたものであろうと思う。従つて、不断この仕事があるわけではないので、亜流の職人が手間取にこしらえる。一種、郷土玩具おもちゃの手頃な獅子があつて、素材らぎづくりはもとより、漆黒で青い瞳、銀の牙きば、白い毛。朱丹にして、玉の瞳、金の牙、黒い毛。藍青らんせいにして、黒い牙、赤い毛。猛たけき、凄すさまじき、種々いろいろで、ちよいとした棚の置物、床飾り、小児こどもの玩もてあそぶのは勿論の事。父祖代々この職人の家から、直槇は志を立てて、

年とし紀十五六の時上京した。

彫刻家にして近代の巨匠、千駄木せんだぎの大師匠と呼ばれた、雲原明流氏の内弟子になり、いわゆるけずり小僧から仕込まれて、門下の逸材として世に知られるようになりました。——獅子屋というのはそうした訳で、人品もよし、腕も冴さえた。この人物が、四十を過ぎて、まのあたり、艶異えんい、妖変ようへんな事実につづかった——ちと安価な広告じみですが、お許しを願って、その、直話じきわをここに、記そうと思う。……

ついでには、さきだつて、二つ三つ、お耳に入れておきたい話があります。

## 二

以前、まだ、獅子屋さんの話をきかないうち、筆者わたしは山の手の夜店で、知った方は——笑つて、ご存じ……大嫌だいきらひな犬が、人混ひとごみの中から、大鰻おおなぎの化けたような面つら……なに馬鹿を言え、犬の面がそんなものに似てたまるかと……御尤ごもつともであります、どうも時々そう見える。——その面が出はしまいかと気にしながら、古本古雑誌の前に踞しゃがみ込んで、おやすく買求めて来ましたが、半紙綴つづり八十枚ばかりの写本、題して「近世怪

談録」という。勿論江戸時代、寛政、明和の頃に、見もし聞きもした不思議な話を筆写したものでありますが、伝写がかさなっているらしく、草行まじりで、丁寧だけれども筆耕が辿々しい。第一、目録が目線であります。下総が下綱だったり、蓮花が蓬の花だったり、鼻が阜になつて、腹が椶に見える。らりるれるはほとんど、ろろろろで、そのまま焼酎火が燃えそうなのが、みな女筆だからおもしろい。

中に、浅草だの、新吉原だの、女郎だのという字は、優しく柔かにしつとりと、間違ひなくかいてある。どうも、このうつしものを手内職にした、その頃の、ごしんぞ、女房、娘。円鬚か、島田か、割鹿子。……やつれた束ね髪でもありましようか、薄暗い行燈のもとに筆をとっている、ゆかしい、あわれな、寂しい姿が、何となく、なつかしく目に映る。何も、燈心の灯影は、夜と限ったわけではありません、しよぼしよぼ雨の柳の路地の窓際でもよし、夕顔のまばら垣に、蚊遣が添つても構いはしない。……内職の仕事といえ、御殿や、お邸でさえなければ、言わずともその情景は惚ばれましよう。

ところで、何しろ「怪談録」です。怨念の蛇がぬらぬらと出たり、魔界の巷に旅人が徜徉ったり。……川柳にさえあるのです……（細首を掴んで遣手蔵へ入れ）……そのかぼそい遊女の責殺された幻が裏階子にイんだり、火の車を引いて鬼が駆けたり、真夜中の

戸障子が縁の方から、幾重にも、おのずからスツと開いて、青い坊さんが入って来たりするのでありますから、がたがたがた、酒屋の小僧が台所の戸を開けても、ハツと思ひ、蚊遣の火も怪しく燃えれば、煙の末に鬼が頭われ、夕顔の蕊もおはぐろでニタリと笑う。柳の雫も青い尾を曳く。ふと行燈に蠟螂でも留つたとする……眼をぎよろりと、頬被で、血染の斧を。

「あれえ。」

筆を持つた白い手を、わななかせたに違ひない。

時に、白い手といえ、「怪談録」 目録の第一に、一、浅草川船中にて怪霊に逢う事、  
というのがある。

当時の俳諧師、雪中庵の門人、四五輩。寛延年としつまびらかならず不詳、霜月のしかも晦日、枯野かかれ見のみからお定まりの吉原へ。引手茶屋で飲んだのが、明日は名におう堺町葺屋町の顔見世、夜うちの中から前景氣の賑にぎわいを茶屋で見ようと、雅名を青楼へ馳はせず芝居に流した、どのみち、傘雨さんさん（久保田氏）の選には入りそうもないのが、堀から舟で乗出した。もう十時よつを過ぎてゐる、やがて十二時このつ。舳へさきが蔵前をさすあたり、漾ようとう蕩たる水の暗さにも、千鳥の声に、首尾の松が音ずれして、くらやみから姿をさしのべ、舟を抱くばかりに思うと、びたりと

留つて動かない。櫓ろづかいをあせる船頭の様子も仔細しさいありげで、夜は深し、潮も満ちて不  
 気味千万、いい合わせたように膝を揉も合あい、やみを透すかすと、心持、大きな片手で、首尾の  
 松を拝んだような船の舳うしほに、ぼつと、白いものが搦からんでゐる。呼吸いきを詰めて見透すと、白  
 い、細ほつそりした、女の手ばかりが水の中から舳うしほに縫すつてあるのであります。「さながら白き  
 布かと思えて、雪のごとし」と、写本には書いてある。うつくしい女の手が布に見えたの  
 は、嘘ではないらしい。狂言の小舞の謡うたにも、

十六七は棹さおに掛けた細布、折取りやいとし、手繰りよりやいとし……  
 肌さえ身さえ、手の縫ぬつた、いとしいのを。

「やあ、畜生。」

この怪ばけもの、といったか、河童かっぱ、といったか、記してないが、「いでその手ぶし切落さ  
 んと、若き人、脇指わきざし、」……は無法である。けだし首尾の松の下だけの英雄で、初めか  
 ら、一人供をした幫たいこもち間まが慌あわてて留めるのは知れている。なぜにその手を取つて引上げ  
 て見なかつたろう。もし枝葉えだに置く霜の影かげに透すかしたらんに、細い腕かひなに袖絡からみ、乳乱れ、褌つま  
 流ながれて、白脛しらはぎはその二片ふたひらの布なを流ながれに搔かき絞しぼられていたかも知れない。

船頭もまた臆おくびよう病びょうすぎる。江戸児えどこだるうに、溺おぼれた女とも、身投わきまとも弁わえず、棒ぼう杭くわい

のようにかたくなつて、ただ、しい、しい、しい、静にとばかり。おのおの青くなつて、息を凝らすうちに——「かの白き手、舳をはなし、水中に消入りぬ。」……

潮に乗つて船は出た。

「が、しかし、水に溺れましたか、あるいは身投の婦人が苦しきのあまり、助りたさにとも申すような……」

幫間、もう遅い。分別おくれに、船頭と相顧みて、「船中このあたりにては、かような不思議はまもある事、後に聞くもの、驚かずという事なし、いかなるものやらん合点ゆかず、恐しかりける事なり。」である。

が、ここを筆耕した、上品な、またおつとりと、ものやさしい、ご新造、娘には、恐しかりける事より、何となく、ものあわれに、悲しく、うら寂しく、心を打たれたらうと思ふ。

あとは隅田の凧である。

この次手に——

浅間山の麓にて火車往来の事

軽井沢へ避暑の真似をして、やどのはらいにまごついたというのではない。後世こそ大事な

れと、上総かずさから六部に出た老人が、善光寺へ参詣さんげいの途中、浅間山の麓に……といえ、まずその硫黄いおうの香と黒煙くろけぶりが想われる。……さて行悩んで、侘わびしげなる茶屋に立寄り休むうちに、亭主がいうには、去年、(享保年中) 八月中ばの事——その日も、やがて八ツ下り。稗黍ひえきびの葉を吹く風もやや涼しく、熔岩とともにころがった南瓜かぼちゃの縁に、小休みの土地のもの二三人、焼土やけつちの通り徑みちを見ながら、飯盛めしもりの彼女は、赤い襦袢じゆばんを新しく買った。笄こしがいを質に入れたなどと話していると、遙はるかに東の方かたよりむら立つ雲もなく、虚空こくうを渡るがごとく、車の駆来る音して、しばらくの間に目まのあたり前へ近づいたのを見ると、あら、可恐おそろし、素裸すはだの荒漢あらかん、三人、車を宙に輻ひくごとし。真先まっさきに、布、紙を弁ひるがええず翻ひるがえした、旗おもとの面に、何と、武州、郡こおりの名、村の名、人の名——(ともに憚はばかると註してある)——歴あ々と記したるが矢よりも早く飛過ぐる。火を揚げ煙を噴いた車の中に、炎かちの擲ちんだように腰くれないの布が紅に裂けて、素裸すはだであろう、黒髪みばかり蓑みののごとく乱れた、軀むくろをのせた、輻やが軋きし、わだちとどろ、礮こっかくたる石徑を舞上つて、「あれあれ浅間山の煙の中へ火の尾を曳ひいて消そえて候そよ、六部どの。われら世過ぎにせわしき身は、一夜の旅も、糧かてゆえに思うに任せず、廻国のついでに、おのずから、その武州何郡、何村に赴きたまわば、「事のよしをも訪といとむらいたまえと、舌ふるを掉ふるつて語つたというのである。——嘘うそばっかり。大小きみたち哥哥

宿場女郎の髪の香、肌ざわりなど大話をしていたらばこそ、そんなものが顛あられた。猪か猿を取つて、威勢よく飛んだか、早伝馬が駆出したか、不埒ふらちにして雲助どもが旅の女を攫さらつたのかも分らない。はた車の輪の疾とく軋きるや、秋の夕日に尾花を燃もさないと言おう——おかしな事は、人が問いもしないのに、道中、焼山やけやま越の人足である——たとえ緊しめなくても済むものを、虎の皮には弱つたと見えて、火の車を飛ばした三個みつの鬼が、腰に何やら襪ぼろを絡まとつていた、は窮きつしている。……ただし窮きつしてまで虎の皮代用の申訳をした、というので、浅間山の麓の茶屋の亭主は語り、六部の爺じいさま様は聞いて、世に伝えたのは事実らしい。

## 三

これに続いて、

目白辺の屋敷猫を殺しむくいし事

下谷したや辺にて浪人居宅けりよう化けりよう霊たまありし事

三州岡崎宿にて旅人ひび狒び々に逢う事

奥州にて旅人山に入り琴の音を尋ねる事

題を見ただけでも、唐から渡りものの翻案で、安価な上方版のお伽稗子そのままなのが直ぐ知れる。

新吉原山口にて客幽霊を見し事

おなじみちよう えびや  
同角 町 海老屋の女郎客の難に逢いし事

二つとも、ものあわれな譚だが、吉原の怪談といえ、おなじようなのがいくらもありません。

こうぜけのくに  
上野 国 岡部の寺にて怪しき亡者の事

みののくに  
美濃 国 の百姓の女房大蛇になる事

どうも灰吹から異形になつて立顕われるのに、蓋をしたい、煙のようなが多い。誰の気もおなじと見えて、ずらりと並べた目録の上に、いつかこの写本を見た読者の心をひいたらしく、ただ一つ題の上に、大きな○をかけた一条がある。

○浅草新堀にて幽霊に行逢う事

曰く、ここに武家、山本氏某若かりし頃、兄の家に養わる、すなわち用なき部屋住の次男。五月雨のつれづれに、「どれ書見でも致そうか。」と気取った処で、袱紗で茶を運ぶ、

ぼつとりものの腰元がなかつたらしい。若い身空にふりみふらずみ、分けてその日は朝から降りつづく遺瀬やるせなさに、築地の家を出て、下谷三みの輪辺わの知辺しるべの許へ——どうも前に云った雪中庵の連中といい、とかく赤蜻蛉あかとんぼに似て北へ伸のすのは当今でいえば銀座浅草。むかしは吉原の全盛の色香に心を引かれたらしい。——三の輪の知人在宿にて、双方心易く、よもやま四方山の話に夜が更けた。あるじ泊りたまえと平にいう。いや夜あるきには馴なれている、雨も小留こやみに、月も少し明ければ途みちすがら五位鶯ごいさぎの声も一興くじやく、と孔雀の尾の机こにありなしは知らぬ事、時ほととぎす鳥ほといわぬが見つけもの才子が、提灯ちようちんは借らず、下駄穿げたばきに傘を提げて、五月闇さつきやみの途みちすがら、洋杖ステッキとは違つて、雨傘は、開いて翳さしても、畳んで持つても、様子に何となく色気が添つて、恋の道づれの影がさし、若い心を嗾そそられて、一人ではもの足りない気がすると言う。道を土手へ切れかかった処に、時節ときふせがら次男、懐中の湿つぽさが察しられる。寂しくわが邸を志して、その浅草新堀の西福寺——震災後どうなつたか判らない——寺の裏道、卵塔場の垣外へ来かかると、雨上りで、妙に墓原が薄うすあ明あいのるに、前途ゆくが暗い。樹立こたたちともなく、葎むぐらぐりに、晴れても傘は欲しかろう、草の葉しずくの雫しずくにもしよんぼり濡々とした、瘦やせぎすな女が、櫛くしまき卷の頸細えりく、俯うつむいた態なりで、棲つまを端折りに青い蹴出けだしが、揺れる、と消えそうに、ちらちらと浮いて、跣足はだしで弱々と来てすれ

違つた。次男の才子は、何と思つたか傘を開いた。これは袖で抱込む代りの声のない初心な挑合であつたろう。……身に沁む、もののあわれさに、我ながら袖も墨染となつて、蓮の葉に迎えようとしたと、後に話した、というのは当にならぬ。血気な男が、かかる折から、おのずから猟奇と好色の慾念が跳つて、年の頃人の妻女か、素人ならば手で情を通わせようし、夜鷹ならば羽搔をしめて抱こうとしたらう。

おんな 婦は影のように、衣ものの縞目を、傘の下に透して、つめたく行過ぎるとともに、暗く消えた。

その摺れ違つた時、袖の縞の二三条ばかりが傘を持った手に触れたのだったが、その手が悚然とするまで冷え透る。……

持ちかえて、そのまま傘を畳んで歩行き出すと、ものの一二町の間というのに、女の袖の触つた片手——内々握つたかも知れないが——腕から肩の附根まで、その冷たさ氷のごとし。振つてみても、敲いてみても、しびれるほどで感じがない。……

今も講談に流布する、怪談小夜衣草紙、同じ享保の頃だという。新吉原のまざり店、旭丸屋の裏階子で、幫間の次郎庵が三つならんだ真中の厠で肝を消し、表大広間へ遁上る、その階子の中段で、やせた遊女が崩れた島田で、うつむけにさめざめ泣い

ているのを、小夜衣の怨靈おんりょうとも心附かず、背中をなでると、次郎庵さん、と顔を上げて、冷たい手でじつと握った、持たれたその手が上と下に、ふわりふわり——幫間に尾花も変だ、芋ずきが招くように動いて留やまない。たちどころに半病人となつて、住居すまいへ帰り、引被ひっかきいても潜つても、夜具の袖まで、ふわふわ動いて、押えても緊しめても、頻しきりに動く。学者は舞踏病の一種だと申されよう。日を経て、ふるえの留やまらぬままに、一念発起して世を捨てた。土手の道哲の地内じないに、腰衣で土に坐り、カンカンと片手で鉦かねを、敲たたき、たたき、なんまいだなんまいだなんまいだ、片手は上うえ下したに振っている。ああ、気の毒だと、あたりの知人しりびと、客筋、の行きかえりの報謝ゆに活きて、世を終った、手振坊主の次郎庵と、カチン（講釈師の木うまい処）後にその名を残した、というのと、次男の才子の容体が、妙に似ている。

が、この方は無事に助かった。細身の大小、まだ前髪立ともいうべき年ごろに、余りといえば手の冷えよう、築地まで帰るのが心もとなく、さいわい蔵前に姉の縁づいた邸があらった。いうまでもなく義兄の住居すまい。真夜中に慌あわしく門を敲たたいて驚かすと、「馬が一所か。」とも言わず、兄は快く一間に招じた。上品な姉の、寝乱れた姿も見せず、早くきちんと着かえて、出迎へたのも頼もしい。

途中、五位鷺の声もきかず、ただ西福寺裏で行逢った、寂しく、あわれな婦を聞くと、兄は深く頷いた。が、まずいうがままにいたされよ、で、ご新姐に意を得させ、鍋をもつて酒を煮た。下戸は知つたが、唯一の良薬と、沸爛の茶碗酒。えい、ほうと四辺を払つた大名飲。

——聞いただけでも邪氣が払える。あとをなお沸立った酒で、幾度もその冷込んだ手を洗わせ、やがて、ご新姐の手ずから、絹衾を深々と被せられると、心も宙に浮いて、やすらかにぐつすり寝た。目がさめると、雨は降っていたが気は晴々となつた、と言います。三田の豪傑だと、片腕頂戴するところ、この武家の少年は、浅草で片手を氷にしようにとした、いささかも武勇めかないだけに、読んでいても、これは事実だと思われる。

ここにもう一条「怪談録」から大意を筆記したい事がある。

### 大森辺魔道の事

明和三年弥生なかば——これは首尾の松の霜、浅間の残暑、新堀の五月雨などとは事かわつて、至極陽気がいい。川崎の大師へ参詣かたがた……は勿体ないが、野掛として河原で一杯、茶飯と出ようと、四谷辺の木工左官など五六人。芝、品川の海の景色、のびのびと、足にまかせて大森の宿中まで行くと、街道をひいて通るのではない、馬五郎、と

いう大工が、このあたりに縁類の久しい不沙汰をしたのがあり、ちよつと顔出して行きたく、お前さん方は一足お先へ。「おう、そうか、久しぶりと聞けば、前方でもすぐには返すまいし、戸口からも帰られまい、ゆつくりなせえ、並木の茶店で小休みしながら待とうよ。」で、馬五郎がその縁類を訪れた。ここの辞儀挨拶は用がないから省略する。どれ、連中に追つこうと、宿はずれへ急ぐと、長閑な霞のきれ間とも思われる、軽く人足の途絶えた真昼の並木の松蔭に、容子の好い年増が一人、容の賤しからぬのが、待構えたように立っていて、

「もし、もし。」

女主人が是非お目にかかりたく、それゆえお迎えに参りました、と言う。

「へへえ、奥様がね。へい、はてな？」

お逢い遊ばせばわかる事、お手間は取らせませぬ、と手がのびて袂を曳かれると春風今を駘蕩に、蕨、独活の香に酔ったほど、馬は、うかうかと歩行き出したが、横、啜少しばかり入ると、真向うに樹立深く、住静めた見事な門構の屋敷が見える。掃清めたその門内へ導くと、ちよつとこれに、唯今ご案内で、婦は奥深く切戸口と思うのへ小走に姿を消した。式台のかかり、壁の色、結構、綺麗さ。花の影、松風の中に一人立

つ大工の目を驚かして、およそ数寄すきを凝ひらした大名の下屋敷にも、かばかりの普請はなからう。折から鶏の声の遠く聞えるのが一入里ひとしお離れた思いがする……時しも家の内遠やい処に、何となく水の音……いや湯殿で加減を見るような気配がした。いかにとぼんとした馬なればといつて、広い邸の門内の素真すまんなか中には立っていない。片傍かたわきに、家来衆、めしつかわれるものの住むらしい小造りな別棟、格子づくりの家うちがあつて、出窓に、小瓶に、山吹の花の挿したのが覗のぞかれる。ふとその窓があくと、島田鬻まげの若い女の、まるい顔が、馬を見ると、はツとした様子で、

「あれ、親方さん。」

「ええ。」

「どうして、こんな処へ。ここをどこだと思ひなさいませ。——畜生道、魔界だことを、ご存じないのでございますか。」

「やあ。」

「人間のもの身では帰られませんよ、どんな事がありましたも、ここで何かめしあがつたり、それからお湯へ入つてはいけません。こういううちにも、早く、早くお遁にげなさいまし、お遁にげなさいまし。」

「やあ、お前さんは。」

「三年あとに、お宅に飼われました、駒ですよ、駒……猫ですよ。」

「ぼったり、出窓の障子が上敷居から落ちて閉った時、以前の年増がもう目の前。」

「お待ちせいたしました。さあさあどうぞ。」

「へい、いえ、その。……」

「さあ。」

「へい、いえ、その。」

「さあ、まあ、どうなすつたんでございますねえ。」

「凄<sup>すげ</sup>い。じつと見た目が袂を引いたより力が強い。見す見す魔界と知りながら、年増の手には是非もない。馬は、ふらふらとなつて切戸口から引入れられると、もう奥庭で、階段のついた高縁の、そこが書院で、向つた襖<sup>ふすま</sup>がするすると左右へ開くと、下げ髪にして襦<sup>うちか</sup>襦<sup>さば</sup>を捌いた、年三十ばかりの奥方らしいのに、腰元大勢、ずらりとついて、

「待ちかねました。よう、見えたの。」

と莞爾<sup>にっこり</sup>。

その襦襦、帯、小袖の綾<sup>あや</sup>、錦<sup>にしき</sup>。腰元の装<sup>よそおい</sup>の、藤、つつじ、あやめと咲きかさなつた中に、

きらきらと玉虫の、金高蒔絵の膳碗が透いて、緞子のが大揚羽の蝶のように対に並んだ。

「草鞋をおぬぎになるより、さきへ一風呂。」

「さつぱりと、おしめしあそばせ。」

腰元のもろ声を聞くと、頭から、風呂桶を引被せられたように動顛して、傍についた年増を突飛ばすが疾いか——入る時は魂が宙に浮いて、こんなものは知らなかった——池にかかった石だたみ、目金橋へ飛上る拍子に、すってんころりと、とんぼう返り、むく起きの頭を投飛ばされたように、木戸口から駆出すと、

「遁すなよ。」

という声がある。

「追え、追え。」

「娑婆へ出た。」

と口々に、式台へ、ぱらぱらと女たち。

門外へ足がのびた。

「手桶では持重りがして手間を取る、碗、碗、碗。」

といった……ここは書きとりにくい。魔界の猫邸であるのに、犬の声に聞えます。が、白脛しらはぎか、前脚か、緋縮緬ひぢりめんを蹴けて、高飛びに追かけたお転婆な若いのが、  
「のぼした、叶わぬ。」

と、その腕を、うしろから投げつけたのが、空くうを足搔あがく馬かの踵かかとに当たると、生ぬるい水がざぶりとかかった。

生命拾いのちびろういを、いや、人間びろいをしたのであるが、家に帰って、草鞋わらじを脱ぎ、足を洗う時心づくつと、いやな気味の水のかかった処ところに、もさもさ黒い毛が生えていた。剃つても削つても、一夜のうちに湧わいてのびる。……のみならず、当分は、

「腕。」

と一言ひとこというさえ、口くちを塞ふさいで、顔の色を変えた。「不思議にも浅間しく人々にも見せ申したり。馬五郎に心安ければ目まのあたりこれを見る。なかなか浮きたる事にはあらず。」  
というのであります。

浮きたる事にも、飛んだる事にも、馬を鹿に、というさえあるに、猫にしようとした……魔魅の振舞も沙汰過ぎる。聞くからに荒唐無稽こうとうむけいである。第一、浅学寡聞かぶんの筆者が、講談、俗話の、佐賀、有馬の化猫は別として、ほとんど馬五郎談と同工異曲なのがちよつと

思い出しても二三種あります。肥ひこのくに後国、阿蘇あその連峰猫嶽ねこだけは特に人も知って、野州にも一つあり、遠く能登ののとの奥深い処にもある、と憶おもう。しかるに前述、獅子屋さん直槇の体験談を聞くうちに、次第に何となく、この話に、目鼻がつき、手足が生えて、獣けものが、鳥か、稀有けうな形で、まざまざと動き出しそうになって来た。

と云つて、いかにすればとて、現代に化猫は出はしません。それは話につれて、自然おわかりになりましたよう。就いては場所——場所は麻布あさぶ——狸穴まみあなではなく——二の橋あたり、十番に近い洒落しやれた処ゆえ、お取次をする前に、様子を見ようと、この不精ものが、一度その辺へ出向いた、とお思い下さい。

#### 四

「ああ、久しぶりだ。」

電車を下りて、筆者は二の橋に一息した。

橋もかわった。その筈はずの事で、水みな上なみ滝太郎さんが白金しろかねの本宅に居た時分通つたと思うばかり、十五六年いや二十年もつとになる。秋のたそがれを思い出す。三田台の坂も今

と違つて、路は暗し、水は寂しい。橋板は破れ、欄干は朽ちて、うろぬけて、夜は狸穴から出て来て渡るものがありそうで、流れに柵しがらんだ真まつくろ黒な棒杭が、口を開けて、落葉を吸つた。——これ、まだ化けては不可いけない——今は真昼まっぴるま間だ。見れば川幅も広くなり、鉄橋にかわつて、上の寺の樹蔭こかげも浅い。坂を上あがつた右手に心覚えの古ふる櫳がしも枝が透いた。踞しゃがんで休むのは身は楽だけれども、憩うにも、人を待つにも、形が見つともない、と別嬪べっぴんの朋友ともだちに、むかし叱ちられた覚えがある。そこで欄干らんだんに凭もたれかかつて煙草たばこを——つい橋はし袂もとに酒場もあるのに、この殊勝じゆせうな心掛こかけを匆散はならして、自動車が続けさまに、駆通る。

解つた。いやしくも大東京市内においては、橋の上で煙草たばこを喫のむ時世ではないのである、と云うのも、年を取ると、口惜くやしいが愚痴ぐちに聞える。

ふけた事をいつて、まず遊ばない算段さんだんをしながら、川添がわぞへの電車道を、向う斜めおつの異な横町へ入いつて行く。……

いきなり曲角まがひの看板かんばんに、三業組合と云うのが出ている。路地の両側の軒のきごとに、一業二業、三業の軒燈のきとうが押合おしかつて、灯は入らないでも、カンカン帽子ぼうしの素通りは四角八面に照らされる。中にも真まん円まるい磨硝子すりガラスのなどは、目金をかけた梔ふくろうで、この斑入ふいりの烏くろめ、と紺こん緋がの単衣ひとえを嘲あざけるように思われる。



女中に職すぎるのが、踞こごんで、両膝で胸をおき压えた。お端折はしより下の水紅色に、絞りで千鳥を抜いたのが、ちらちらと打水に影を映した。乱れた姿で、中形青海波せいがいほの浴衣の腕を露あ呈らわに、片手に黒い瓶かめを抱いだき、装塩もりじおをしながら、撮つまんだ形なりを、抜いて持った銀かんざしの簪かんざしの脚で、じやらすように平直なちしていた。

流行の小唄端唄はうたなど、淨瑠璃じよるりとは趣かわって、夢にきいた俗人の本歌のような風情がある。

荒唐無稽だの、何だのというものの「大森辺魔道の事」人はこんな時に、この物語を思出すのが、身のためだろう。

その黒い瓶を取って投げられたら。……  
筆者は足早たちに立退たちいた。

出抜けると丘が向うに、くつきりと樹が黒い。山下町はこの辺らしい。震災に焼けはしなかつた土地と思うが、往來ゆききもあわただしく、落着きのない店屋が並んで、湿地しけちか、大溝おおどを埋ぶめたかと思え、ぼくぼくと板を踏んで渡る処が多い。

ここへ来たのは、もう一ヶ処、見て戻りたい場所があつたからで。……足場のよくない、上り道だが、すぐ近くに、造作なく、遠い心覚えの、見当がついた。

——一本松と、そのの一基の燈籠である——

おなじ一本松という——名所が、故郷なる金沢、卯辰山の山の端にあつて、霞を絡い、霧を吸い、月影に姿を開き、雨夜のやみにも灯一つ、百万石の昔より、往來の旅人に袖をあげさせ、手を翳させたものだった、が、今はない。……

浮浪の徒の春の夜の焚火に焼けて、夜もすがら炬火を漲らせ、あくる日二時頃まで煙を揚げたのを、筆者は十四五の時、目のあたり知つてゐる。草の中に切株ばかり朽ちて残つた。が、年々春も耐になると、おなじ姿の陽炎が立つといひます。むかし享保頃、ここに若い人の、きれいな心中があつて、地方の事で数の少い、また多くてはならないが、もののおわれのいいつたえを、幼い耳にも伝えられたものだった。

麻布の松は、くらがり坂の上にかくれて、まだ見えない。道の右手に、寺の石磴がすつくと高い。心なしか、この磴が金沢の松の上り口にそっくり似てゐる。（ここを、直槓があが上つた事はやがて知れます。）

また上り坂なりの石磴だから、いよいよ聳えて、階子を斜に立てたようである。下に、道端の高い空地で、草の中に子供が大勢遊んでゐるのも、卯辰山のその麓を思い出させた。

「一本松の先に、ちよつとここを上つて見よう。」

ふるさとも可懐しい、わずかに洋杖をつくかつかぬに、石磴の真上から、鰻が化けたか、仙人掌が転んだか、棕櫚が飛んだか、ものの逞ましい大きな犬が逆落しに（ううう、わん、わんわん！）

そりやこそ出たわ、怯えまいか、大工の馬五郎ならざるものも、わつと笑う子供の声も早鐘のごとく胸を打って、横なぐれに、あれは狸坂と聞く、坂の中へ、狸のような色になって、紺飛白が飛込んだ。

そのまま突落されたように出た処は、さいわい畜生道でも魔界でもない。賑かな明い通りで、血腥いかわりに、おでんの香が芬とした。もう一軒、鮭の酔が鼻をついた。真中に鳥居がある。神の名は濫に記すまい……神社の前で、冷たい汗の帽子を脱いだ。

自動車が来たので、かけ合つた、安い値も、そのままに六本木。やがて、赤坂櫓町へ入つて、溜池へ出た。道筋はこうなるらしい。……清水谷公園を一廻りに大通を過ぎ番町へ帰つたが、物として、浴衣に着換えて、足袋を脱ぐ時、ちよつと肩をすくめて、まず踵、それから、向脛を見て苦笑したのは、我ながら呆けている。

けれども、直槓の事は、真面目にお聞きを願う。お聞きになると、あんまり呆けていないのにお心付きになろうかと思う。……

さて、以下、直槓から聞いた話を、そのままお伝えするのである。

## 五

二人対坐で、酌人はわざと居なかつた。獅子屋さんは盃をちよつと控えた。

「——雪の家や、……雪の家というその待合です——

(今日は、ご免下さい。)

あなた方はそうした格子戸を開けて、何と云つて声をお掛けになりましたよかしら……  
おかしな口のきき方です、五月雨時の午後四時ごろ、初夏はつなつ真昼間だから、なおおかし  
い。

土間わきの壁を抜いて、御神燈といひますか、かき入れなしの磨硝子すりガラスに、鉢から朝顔  
の葉をあしらつて夕顔に見せた処が、少々歪曲ゆがんで瘦せたから、胡瓜きゅうりに見えます、胡瓜  
に並んで、野郎が南瓜かぼちゃで……ははは。

処へ、すぐ取次に出た女中が……間に合せのこおんな小女。それに向い、改つて、

(小石川白山の小山と申すものですが。)

……どうもおかしい。ここへ来るのに、私は、ご存じと思います、二の橋の袂たもとで自動車を下りましたが、三業組合の横町へ、一文字に入れそうもありません。また入れるにした処で、ちと大袈裟おおげさで、近所騒がせだと思いました。

運転手が深切に、まごつくと不可いけません。先方は、と聞いて、一つ探険をして参りましょう。探険もまたおかしい。……実は、自宅玄関へ出た私も家内が、「先途さきは麻布の色町ですよ、」とこの運転手に聞かせたからですが。——「行つていらつしやい。」家内見送りでもつて、昼間の待合行ゆきは余り数を覚えません。勝手が違つたので、一枚着換えたやつが、しからばともいわず、うっかり、帽子の茶系統ちしやう処を、ひよいと、脱いで、駆出したのがすでにおかしいのでございました。

そこで、

(当屋ごしらに、間淵まぶちさんのお妹ごはおいでになるかね。)

淵が瀬にしろ、流ながれにしろ、そのお妹ご、とお聞きになると、何となく色気があります。ところがどうして、胡麻塩ごましおの三分刈、私より八つばかりも年上の媼ばあさんだから、お察しを願いたい。

——五日以前、暮方です。膳に向つた、電燈を点つけようという処へ、電話が掛かつて、家

内が取次に出て、……「小山でございます、はい、あなたは、はあ、雪の家さん。」どうも雪の家という響き、何、響くほどの広さじゃない。あの手狭ですから、直ぐそこに、馬鹿な……受話器に向つたものの顔も白いように聞えて優しい名だな、と思いますと、はい、と受けていましたつけ。

——おわすれかも知れませんが、二十四五年前に、お目に、かかったきりですが、間淵の妹です。間淵は昨年なくなりました。けれど自分で一度お目にかかりたいと思ひながら、つうかがいそびれておりましたところ、このごろ、そちこち、新聞などで、名前を、写真を、見受けますし、ところも分りましたからちよつとお目にかかりたい。「そういつて……二の橋の、きこえたでしよう、おつな名の待合から。」笑ひながら、「大分、婆さんの声、お菜と一緒に、お生憎。」……「分つた、分つた、断つてもらおう。」「いいんですか。」「勿論、久しく煩いまでも可厭な言種だが、とにかくだ、寝ているからおいで下すつても失礼します、いずれそのうち、ご挨拶だ。」……

——あとで、——おだいじにまた折を見ましてで電話を切りましたが、誰方？ といつて、家内が聞きます。

その時話した事ですが、さあ、もう十四五年も前だったろう。……馳走酒のひどいの

をしたたか飲まされ、こいつは活がいいと強いられた、黄肌鮪の刺身にやられたと見えて、家へ帰ってから煩った、思い懸けず……それがまた十何年ぶりかで、ふと出会った旧い知己で、つい近所だから、と裏長屋へ連込まれた……間淵がそれだ。——いやそれなんです——

足の短い、胴づまりで肥った漢子の、みじめなのが抜衣紋になって、路地口の肴屋で、自分の見立てで、その鮪を刺身に、と誂え、塩鮭の切身を竹の皮でぶら下げてくれた厚情を仇にしては済まないが、ひどい目に逢ったのを覚えているだろう。これが間淵。その漢子の妹だよ、いま電話のかかったのは——と家内に。

が、妹には、逢ったというより見た事があるかないか、それさえよく覚えていない。——思い出せば、その酒と鮪の最中、いや、灘の生一本を樽からでなくつちや飲めない、といった一時代もあったが、事、志と違って、当分かくの通り逼迫だ。が、何の、これでは済まさない、一つ風並が直りさえすれば、大連か、上海か、香港、新嘉坡あたりへ大船で一艘、積出すつもりだ、と五十を越したろう、間淵が言います。この「大船で一艘積出す、」というのが若い時からその男の癖だった。話の中に、一人娘は、七八ツの時から、赤坂の芸妓家へ預けてある、といったのも、そういえば記憶がある。

——亡くなった、という電話だが、あとさきの様子から待合に縁がありそうに思われる。その節、取りまぎれて、折返しとは行かなかつたけれども、二月とはおかず、間淵の住居を訪ねたが、もうどこかへ引越した。行くさきさえ、その辺で聞いても分らなかつた、という始末なのですから。

(電話は聞きながしにしておこう。)

(義理の悪いことはないんですか。)

(言うにや及ぶべき。)

晩酌で、陶然として、そのまま肱枕ひじまくらでうたたねという、のんきさではありません。急ぎの仕事に少し疲れていた時であつたのです。

ところがどうです、その翌日、まだ朝のうち、玄関で早口に饒舌しゃべっている女の声が出て、すぐに取次のいうのを聞くと、年をとつては氣ぜわしい、堪こたえ情がなくなつて訪ねて来た。しかじかの口上。起きられぬほどの容体でなければちよつと逢いたい、と昨夜ゆうべの今朝けさで、その間淵の妹が追掛けてやつて来ました。

不精から、面倒くさいというばかり、逢つて差支えはちつともないので、それに白山——麻布からは大抵の苦勞じやない、勿論断る法はありません。玄関さきの座敷へ通させ、

仕事場の小刀をおいて出て逢いました。

(ああ、ああ、さてお久しいことやぞや、お懐しい。)

申しては驕りの沙汰だが、「ことやぞや」ではお懐しいがられたくない、ところへ、六  
十近いお婆さんだから、懐しさぶりを露骨に、火鉢を押し乗出した膝が、襷振れの  
黒袴。紬だか、何だか、地紋のある焦茶の被布を着て、その胡麻塩です。眉毛のもじ  
やもじやも是非に及ばぬとして、鼻の下に薄髭が生えて、四五本スクと刎ねたのが、見  
透される。——この性格、何とお思いません。——

(——と話した時、小山直槇は眉を顰めたのであった——)

「……余儀ない次第と申そうか、了見違いと申そうか、やがて、真夜中にこの婆さんを見  
なければならぬ羽目に立到りました時は、この面相にして、白を着て、黒い被布です、  
朱袴を穿いていたのだから、その不気味さをお察し下さい。

その朝だつて、家内が挨拶に出ようというのを、私が差留めたほどでした。

(まことにしばらく、……お珍らしい。)

と、時に、挨拶をするのも上の空で、人様の顔を失礼だが、うっかり見まもっているう  
ちに、吃驚するように、思い出したのは、私が東京へ出ました当時「魔道伝書」と云う、

変怪至極な本の挿画さしえにあつた老婆の容体で、それに何となくそのままなんです。

——「魔道伝書」ようございますか、勿論、板本でなし、例の貸本屋を転々する写本でなく、実にこの婆さんの兄の間淵が秘蔵した、半紙を部厚に横綴よこじの帳面仕立で。……都合があつて、私と二人で自炊じすいをして、古襦袢ふるじゆばん、ぼろまでを脱ぎ、木綿の帯を半分に裂いて屑屋くずやに売つて、ぼんぼち米を一升炊きした、その時分はそれほど懇意だつたのですが。

——また大食いな男で、一升一かたけペロりの勢いきおい。机を売り、火鉢、火箸ひばしから灰を売食といつた時でも、その「伝書」は手離さなかつた。もつとも渋を刷はいた厚紙で嵌はめ込の蔽おおいがあつて、それには題して「入船帳いりふね」。紙帳も蚊帳もありますか、煎餅蒲団せんべいぶとんを二人で引張ひりながら、むかし雲助の昼三話。——学資を十分に取つて、吉原で派手をした、またそれがための没落ですが、従つて家郷奥能登の田野の豊熟みのり、海山の幸を話すにも、その「入船帳」だけは見せなかつた。もうその頃から、「大船を一艘いっぱい」が口癖で、ただし時世だけに視野が狭い。……香港、新嘉坡といわないで、台湾、旅順へ積出すと言います……：こいらの胸算用——計画の覚おぼえだ、と思うから、見る気の起る筈はずもありません。

間淵は、名さえ洞齋とうさいといいました。家は祖父の代から医師なのを、洞齋本人は法津が目的で、勉強をするのは、能登では間に合わない。おなじ県でも金沢だけにありました専

門学校へ通うのに、私の家を宿にした。——賭つき間貸と称える、余り嬉しくもない、すなわちあれです。私との縁はそれなんです。

やがて、間淵が東京へ出て、三年目かに、私も……申すはお恥しい、今もこの通りですが、志を立てて上京した。とつかかり草鞋を脱いだのが、本郷元町にあつた間淵の下宿で、「やあ、よく来たね、」は嬉しいけれども、旅にして人の情を知る、となると、どうしても侘しい片山家の木賃宿。いや、下宿の三階建の構だったので、頼む木蔭に冬空の雨が漏つて、洋燈の笠さえ破れている。ほやの亀裂を紙で繕つて、崩れた壁より、もの寂しい。……第一石油の底の方に淀んでいる。……そうでしょう、下宿料が月の九つ以上も滞つた処だから、はじめな女郎買じやないけれども、油さしも来やしない。旅費のつかい残りで、すぐに石油を買う体裁、なけなしの内金で、その夜は珍らしく肴を見せた、というのが、苦渋いなまり節、一欠片。大根おろしも薄黒い。

が、「今に見たまえ、明日にも大船で一艘台湾へ乗出すよ。」で、すぐにその晩、近所の寄席の色ものへ連出して、中入の茶を飲んで、切端の反古へ駄菓子撮んで、これが目金だ、万世橋を覚えたまえ、求肥製だ、田舎の祭に飴屋が売つてるのとは撰が違う、江戸伝来の本場ものだ。黒くて筋の入つたのは阿蘭陀煉、一名筏羊羹。おこしを食う

のに、ばりばり音を立てなさんな、新造に嫌われる、と世話を焼いて、帰途が、屋台の牛めしです。寝床で話しながら遣らかそう、と精進揚を買って帰る。易くて腹にたまつていと云ううちにも、油ものの好きな男で。

——ですから、のちに、私とその「魔道伝書」のすき見をした時も炬燵櫓……（下へ行火を入れます）兼帯の机の上に、揚ものの竹の皮包みが転がっていました——

そういつた趣で、啖う事は、豆大福から、すしだ、蕎麦だ。天どんなぞは驕の沙汰で、辻売のすいとん、どうまた悟りを開いたか、茶めし、餡かけ、麦とろに到るまで、食いながら、撮みながら、その色もの、また講釈、芝居の立見。早手廻しに、もうその年の西の市を連れて歩行いた。従つて、旅費の残りどころか、国を出る時、祖母が襟にくけ込んだ分までほぐす、羽織も着ものも、脱ぐわ剥ぐわで、暮には下宿を逐電です。行 処がないかと思うと、その頃の東京は、どんな隅にも巢がありました。裏長屋の九尺二間へ転げ込むのですが、なりふりは煤はきの手伝といった如法の兩人でも、間淵洞齋がまた声の尻上りなのさえ齒切れよく聞える弁舌爽で、しかも二十前に総持寺へ参禅した、という度胸胡坐で、人を食っているのですから、喝、衣類調度の類、黄金の茶釜、蒔絵の盃などは、おツつけ故郷から女房が、大船で一艘、両国橋に積込むと、こんな時は、安房上総

の住人になつて饒舌しやべるから、気のいい差配は、七輪や鍋なべなんぞ、当分は貸したものです。

徒士町おかちまちの路地裏に居ました時で。……京では堂宮の絵馬を見ても一日暮せるといふ話を聞きます。下谷のあの辺には古道具屋が多いので、私は希望のぞみが希望だったから、一二長

町まちや柳盛座の芝居の看板の前には立ちません、若い時だから寒さには強い。ぶらぶら何を

見て歩行あるしていたかは、ご想像に任せますが、空腹すきはらの目を窺くほまして長屋へ帰ると、二

時すぎ。間淵は見えないで、その煎餅蒲団のかかった机の上に、入船帳おおいの蔽おおいを抜けて、横

綴の表紙が前申した、「魔道伝書」、題ばかりでも、黙つて見たままで居られますか。いきなり開けた処に、変な、可訝おかしな、絵があつたのです。

若い、優しい女が裸体、いや、裸体じゃないが、縁の柱に縛られた、それまでのかよわ

い抵抗、悩乱が思われる。帯も扱しじき帯もずり落ちて、絡まつわつた裳すそも糸のように搦からんだばかり。

腹部を長くふつくりと、襟すべの辻すべつた、柔かい両の肩、その白さ滑かさというものは、古ぼ

けた紙に、ふわりと浮く。……

が、もう断念あきらめたのか、半ば氣を失つたのか、いささかも焦躁しょうそう苦悶くもんの面影がない。弱々と肩にもたせた、美しい鼻筋を。……口を幽かすかに白歯かすかを見せて、目を睜みひらいたまま恍惚うつつとりしている。



足を、ぐつたりと、濡縁に髪を流し、白く蹴出した、その一本のふくら脛はぎの膝から下に、むくむくと犬だか猫だか浅間しい毛が生えて、まだ女のままの指尖ゆびさきが獣けものの鱗爪ひづめに屈かがまつて縮んでゐる。

——（ようゆう）です、ね、老婆ばばあは、今度は竹篋くわを口に啣くわえて、片手で瓶ふたの蓋おさを圧おさえ、片手で「封」という紙きれを、蓋の合せ目へ禁おしながら、ニヤリとしている。

その、老婆ばばあに、形も面も、どことなく肖にているのですよ。唯今お話をしました、——二の橋の待合から電話を掛け、当分病氣だといって断つたのに、すぐに翌日、白山の私宅へ来た。——

「——お懐しい。」と袴の膝を不遠慮に突きつけた、被布で胡麻塩の間淵の妹。

ちよつとお待ち下さい。

「うう、うううう、おお、おお、苦しい。」

だしぬけに目の前の厠かわやで、うめく声がすると、ぱったり戸を開けて出たのが間淵で、——  
——こんがらかると不可いけません。——兄洞齋のぞです。

私のぞがその魔道伝書を覗のぞいているのを見ると、

「や、いつ帰った。」

というが早いのか、引手繰るや否や、肥っているから、はだかった胸へ腋の下まで突込んだ、もじやもじやした胸毛も、腋毛も、うつくしい、情ない、浅間しい、可哀相な婦を揉みくたにして、捻込んだように見えて、毛の生えた方も、白い方も、そのまま瞼にちらついて、覚えていきます。私は、ぱちぱちと瞬した。

「飛んでもない、こりや見せるもんじやない、いや、見るもんじやない。第一若いものが見ては大変だ……」

酷く腹が痛んで、私の帰ったのが夢中で分らなかつたから、うっかりした折からだそう  
で。……渋豌豆の堅いやつを、自分で持つて行つて、無理に頼んで、うどん粉をこつて  
りと、揚物にさしたという、それに中てられたんです。

なかなか、絵も二枚や三枚じやない、ずツしり分厚に綴込んだ一冊で、どんな事が書いてあるか知れませんが。冒険的にも見たかつたのでありますが、牛若ほどの器量がないから、魔道妖異の三略には、それきり、手を触れる事が出来なかつた。

## 六

「なあ、それにしても、ほんにほんに久しいものやて、にい……」

さて、袴を穿いた婆さんはいうのです。巻まきたばこ 蓑かぶとを吹かしますが、取出すのが、持頃の呉ごろ縞らしい信玄袋で、どうも色合といい、こいつが黒い瓶かめに見えてならなかつた。……

「あの時分」……

自分で尼、尼という、襟に大形の輪数珠も掛けていましたが、容体が巫女みこにも似て、両部も三部も合体らしい。……「尼ども、両親はどうになくなって、もともと身しんしょう上じょうの足りぬ処を、洞齋兄の学資といえば、姉の嫁よめ、私わしには嫂あによめじゃにい、その里方から末を見込んで貰いでおった処を、あの始末で、里をはじめ、親類もあいそを尽かせば、嫂あねも断念あきらめた。それやで、に、嫂の里へ引取つて養うてくれておった尼を連れて、東京へ、徒士町の長屋へ出向いたというものは、嫂は縁切り、尼はまたこの広い世界へ棄てられた。島流し同様のものやつたが、にい——

人間の侘わびしい住居すまいというより、何やら、むさくるしい巢なかのような裡なかから、あんたは、小僧に——」

そうです。千駄木の師匠、雲原明流氏の内へ、縁あつて弟子小僧に住込みました。

これは申すまでもありません。

「洞齋の兄の身に見ればじや、にい、この妹をつれて、女房が上京するといえばや、当分だけなど、くらしをつける銭金の用意をしていて、一緒に世帯をするものと思うたのが、そのしだら魂胆や。つら当にも、その場からでも、妹を奉公させる……また奉公もせんならん。翌あくるひ日ひが日の糧にも困った、あの逼ひっぱく迫はくやよつてに、すぐに口を見つけて、にい、わすれもせんぞに——あなたはその千駄木へ。尼は、四谷へ、南と、北へ。……一日の違いで徒士町から分れたというもんじや。地方いなかで結うたなり、船や汽車で、長いこと、よう撫なでつけもせなんだれど、これでも島田齧なやつたが、にい。」

私は顔を見た。

「覚えておいでますかにい——ちよつとの間やつたけれど、おなごりが惜しかったぞ。北と南へ。」

どつちが北だか、南だか、方角に途迷とまじいしたが、とにかく分れたのは難ありがた有かった、と思ひました。……それに、言いわゆるれば、白粉おしろいをごつてり塗つけた、骨組あねの頑丈あねな嫂あねというのには覚えはあるが、この、島田齧なには、ありそうな記憶が少しもない。

「命さえあれば、にい、どこでどう、めぐり逢わんとも限らんもんや。したが、尼も、こ

の奉公を振出しに、それは、それは太いこと、苦勞辛苦をしたもんや。」

ここで、長々と身の上話をはじめた。が、くどいから略しましょう。あり来りの事で、亭主が三度かわつた事だの、姑小姑に虐められた事だの、井戸川へ身を投げようとした事だの、最後に、浅間山の噴火口に立つて、奥能登の故郷の方に向つて手を合わせて、いまわという時、立騰る地獄の黒煙が、線香の脈となつて、磊々たる熔岩が艾の形に変じた、といひます。

ちよつとどうも驚かされた。かねて信心渴仰の大、大師、弘法様が幻に影向あつた。灸点の法を、その以心伝教で会得した。一念開悟、生命の活法を獲受して、以来、その法をもつて、遍く諸人に施して、万病を治するに一点の過誤がない。世には、諸仏、開祖の夢想の灸と称うる療術の輩は多いけれども。

「尼のに限つては、示現の灸じや。」

「——成程。」

「……昨宵も電話でのお話やが、何やら、ご病氣そうなが、どんな容体や。」  
「胃腸ですよ、いわゆる坐業で食っていますから、昨夜なぞは、きりきり疼んで。」  
「いづれ、運動不足や、そりやようないに。が、けど何でもない事や。肋膜、肺炎、腹

膜炎、神経痛、胸の病、腹、手足の病氣、重い、軽い、それに応じて、施術の法があつて、近頃は医法の科学的にも、灸点を認めているのやが、その医法をも超越して、（時々むずかしい事をいいます。）氣違が何や……癩らひでも治るがに。胃腸などはそりやに、お茶の子じやぞ。すぐに一灸で、けろりとする。……腹を出しなされ、は、は、は、これでもあんだ、島田齧なしみやて、昔馴染なしみには。」

「ま、ま。」

「療治の用具もちゃんと揃えて持合わせておる、に。」

「まあ、まあ。」

「熱いと思うてかに、熱い……灸やから。は、は、は。微塵みじんも、そりやない。それこそ弘法様示現の術や、ただむずむずとするばかり。」

「まあ、しかし。」

「ただ、あんたのものを使うというては、火鉢の火を線香に取るばつかりや。」  
弱つた。

「それやかとても、火道具はちゃんとここに持つておるがや、燐寸マッチなどは使わんど、艾もぐさにうつす附木つけぎには、浅間山秘密な場所の硫黄が使うてあるほどに。」

なお弱った。

「どうも、灸だけは……ですよ。」

「お嫌いかに。」

「嫌いにも、なにも。」

「好嫌いは言うておられんぞに、薬には。それやし、何せい、弘法様の……あんたお宗旨は。」

「ほっけです。」

「堅けんほっけ法華、それで頑固や。」

「いや、いやそんな事より、なくなった母親の遺言です、灸は……」

「その癖、すえられなさる様な事が沢山あるやろ、は、は、は。これでも昔は島田鬻や。」  
と口を開けて、それでも皮肉ではなさそうに笑った。

「時に、洞齋さんは、何の病気で。」

と聞くと、

「中気でに、四年越。」

私も、何も、皮肉でいったのではなかった、気違も、癩さえ治すというのに対して。――

—しかし四年越、中気でなくなった事をいつてからは、おかしく、急に陰気になって、帰支度をする。蒸しものの菓子かしを紙に包んで、ちよつと頂いた処は慇懃いんぎんで却つて恐縮。納めた袋の緒を占めるのが兜かぶとを取つたようで、敵あいつに居直つて、正午頃ひるごろまでに、見舞う約束が一軒。さて、とる年だし、思い立った時に逢つて見たいのを、逢つて見ぬと、いつまたお目にかかれようと、それゆえにこそ、といつて起つた時には、すこしばかり妙な寂しい気がしたのです。

人情ですか、争えない、それもあります。それに、自動車でなくつては運ばれない。嵩かさ張つた手土産がありました。

「義理さえ欠けなければ。」

とあとでいう家内の言ことばについては、使で礼を返しても、その義理は欠けなかつたが——逢つて見たい時に逢つておかぬと、いつまたお目に掛れるか——まだ仕事場へ帰らない——送出して取つて返し、吸いかけの巻まきたばこ 蓑つまをまた撮んで、菓子盆を前に卯うの花のなよなよと白いのを見ながら、いま帰つた尼巫女あまみこの居どころを、石燈籠のない庭越に、ほのかに思いうかべました。待合、雪の家。

姪めいに当る、赤坂に芸妓げいしやをしていると、いつか聞いたのが、早く旦那なるものにひかさ

れたか、事情はとにかく、心づもり二十はたちそこいらで、まだ、若い。

この後見なり、客のとりまわし、家のきりもりをしていると思われる、その母親があるのです。妹ぐるみ打棄うつちやった、……いや間淵洞齋が打棄られた女房の、後二度目の女房なのです。後添のちぞい、後妻、二度目の嫁といつても、何となく古女房のように聞えますが、どうして、間淵と夫婦になった年が、まだ、ほんの十五六。で、ただ一度だけ、その頃、私が、本所で逢った事がある。……

師匠明流なまけの情で、弟子小僧に、住込んだ翌年の五月です。花時に忙がしい事があつて用が立んだかわりに、一日お暇が出て、小遣こづかいを頂いた。師匠は大家でも弟子は小僧だ、腰の煙草たばこいれ入にその銀貨を一枚「江戸あるき」とかいう虫の食った本を一冊。当日は本所の五百羅漢へゆくつもりで、本郷通りを真すぐに切通し、寄席の求肥の、めがねへ出ました。すたすたもので、あれから、柳原を両国まで、鉄道馬車で、あとはまた大歩あ行きに歩行くつもり、ところが、馬車を下りる時、料金を払おうとする、と、落したのか、すられたのか、煙草入がありません。小遣ぐるみ。あつと慌てたが、それだけじゃ濟まない。広小路のあの群集の中で、しよぼしよぼと監督の前へ出されたのですが、突出したとは言いますまい。連れてった瘦やせた車掌がいい男で、確たしかに煙草入を——洋服の腰へ手を当てて

仕方をして——見たから無銭ただのりではありません。掏すられたのです。よろしい、と肥った監督おおきが大きな衣兜かかしへ手を突つ込んで、のみ込んでくれました。

羅漢たちの中には、苦しい断食の業を積んだのがありましよう、思っただけでも足がすくむ。ありようは五百体より一杯をあてにした、蕎麦そばも、ちらしも、大道の餅も頬張れない。……それ以上に弱つたのは煙草が飲めない。参詣さんけいはしましたが、亀井戸の境内で、人間こうなると、目が眩くらみます、藤の花が咲いていたか、まだだったか、それさえも覚えていません。

太鼓橋の池のまわりの日当りの石に、順礼の夫婦が休んでいて、どうでしょう、女房が一服のんでいて、継ぎはぎだが紅あかいところの見える、襦袢じゆばんの袖で、

「アイ」

あいと脚絆きやはんの膝をよじつて、胸を、くの字なりに出した吸付煙草。亭主が、ふっかりと吸います、その甘味うまそうな事というものは。……

余計にがつがつして、息を切つて萩寺の方へ出たでしょうか、真暗まつくら三方さんぼうという形、かねて転居てんきょさきを端書たんがで知っていました、曳船ひきふね通どおりの間淵まづみの家に辿たどり着いた。ここで一ひ片餉かたけありつこうし、煙草錢の工面をつけようと思ひました。ところがどうです。——そ

の時分の事で、まだ藁葺わらぶきの古家で、卯の花の咲いた、木戸がありました。柱に、「東海会社仮事務所」と出ていて、例の大船で一艘積出す男は、火のない瀬戸の欠火鉢を傍わきに、こわれた脇きょうそく息びろうどの天鵝絨ひきはがを引剥ひきはがしたような小机によっかかって、あの入船帳ひじに脇ひじをつけて、それでも莞爾にこにこ々々している……

「これ、お茶をよ。」

と破襖やぶれぶすまの次の間へ。

「何だ、焼芋、蕎麦、ごもく、豆大福、豌豆えんとうの入った——うふ、うふ、うふ、うふ。」

と尻上りの冴えた声で、笑わらいを肥ふとった腹へ揺ゆった。

「鼠が貿易をしましまいしよ、そんなものを積んで大海を渡れるものか。その了見だと、折角かぶあれだけの名家の弟子になりながら、小刀で蟻を刻んでいやしいかね。

蕪かぶにくつつけてさ、それ、大かぶにありつく、とか云って、買手が喜ぶものだそうさ。

いや、これは串戲じょうだんよ。船はちゃんころでも炭薪すみまきや積みぬというのが唄にもある。こんな小さな家うちだつて、これは警たしえば、電気ぼたんの釘ひねだ。捻ひねる、押すか、一たび指が動けば、横浜、神戸から大船が一艘いっばい、波を切つて煙を噴はくんだ。喝あこ！」

と大きな口をあけながら、目を細く、頬しきりに次の間を頤あごで教えて、目顔で知らせて、

「お茶を早くよ。」

貧しい盆に茶碗をのせて、気候は、そんななのに、もう白地の浴衣です。髪だけは艶々や々と島田に結っていました。色の白い吃驚するほど人柄な、その若いのが、ぽつと色を染めて、黙って手をついた頸脚が美しい。

「きみ、小山、今度の妻だよ。」

その時、ついた手が白く震えた。

「冬というよ、お冬です。こりや親しい同県人だ。——お初に、といわないかね。」

「お初に。」

といった時、耳まで紅く染まった。それなり襖の影へ消えました。私は一息に空腹へ飲んだのですが、それは茶ではないのです。冷水に、ちらちらと白いものが浮かしてある、香煎は色がありますよう、あられか、菓子種か、と思つたのが、何と、志は甘かった、が、卵の花が浮かしてあつたんです。毒にはなりません、何事もなかつた処を見ると、枸杞の花だつたかも知れませんが、白く、細かくて、枸杞は薬だといえますから。

そうと知つたら、言いますまいものを。……水は、実は途中で、三度ぐらい飲んでいましたから、東海会社社長の顔を見ると斉しく、息が切れる、茶を一杯、といつて、それが

ら焼芋、蕎麦、大福の謎を掛けた。申すまでもなく煙草入をなくした顛末を饒舌つてからですが、これに対する社長の応対は、ただ今お聞かせ申した通り。

湯を沸す炭もなく、茶も切れていたのです。年も二十以上違っている。どうしてこんな細君を。いや、あの、片時も手離さない「魔道伝書」を見るがいい。お冬さん、上品な、妍美い娘は、魔法に、掛けられたものでしょう。

千駄木へ帰ってから、師匠に鉄道馬車の監督の話をする、気に入った。その寛容と深切に対しても、等閑に棄てては置けない、料金は翌日にも持参しなさい。で、二日ばかりにおいて、両国まで、その持参です。……なくなしたお小遣の分まで恵与に預る。……余程、曳船へ廻りたかった。堅莢豆ぬきの精進揚か、いや、そんなものは東海会社社長の船には積むまい。豆大福、金鍰か。それは新夫人の、あの縹緞に憚る……麻地野、鹿の子は独り合点か、しぐれといえ、五月頃。さて幾代餅はどこにあらう。卯の花の礼心には、砧まき、紅梅餅、と思つただけで、広小路へさえ急足、そんな暇は貰えなかつたから訪ねる事が出来なかつた。

盆やすみに、今日こそと、曳船へ参りましたが、心当りの卯の花垣は取払われて、窪んだ空地に、氷屋の店が出ていました。……水溜りに早咲の萩が二つ三つ。

そういつたわけで、それきりになったのですが、あと十何年、不意に、また間淵洞齋に出会って、悪酒わるざけにあてられた事を申しました。――

それは、白山の家うしろを出て、入費のかからない点、屈くつきよう 竟あきばかりでなく、間近な遊山ゆざんといつてもいい、植物園へ行って、あれから戸崎町の有名な豆腐地蔵とうふじぞうへ参ろうと、御殿町へ上ると、樹林じゆりん一ひと構かまえ、奥深い邸の門に貼はり札ふだが見えたのです――驚流狂言、開興かいこう。入場歓迎。――日づけが当日、その日です。時間もちようどでありました。

舞台では、もう「宗八」というのがはじまっていたのですが、広書院の一方を青竹で劃くぎつただけが、その舞台で、見物席は三十畳ばかりに、さあ十四五人も居ましたか、野分のあとの庭の飛石といった形で、ひっそり、気の抜けたように、わるく寂しい。

例の、坊さんが、出来心で料理人になって、角頭巾すみずきん、黒長衣くろながごろも。と、俎まないたに向つた処――鮒ふなと鯛たいのつくりものに庖丁を構えたばかりで、鱗うろこを、ふき、魚頭を、がりり、というだけを、咄どる、あせる、狼狽うろたえる、胴忘れをしてとぼん、としている。

海豚いるかが陸おかへ上つた恰好かっこうです。

仕切の竹で、これと向合い、まばらな見物の先頭まえがわに、ぐんなりした懐手で、悄しおれた鱈ひれのように袖をすぼめていた、唐棧柄とうざんがらの羽織で、黒い前垂まえだれをした、ぶくりとした男が、

舞台で目を白くする絶句に後退りをしながら振返ったのが、私に気がつく、そのまま……熟と視た。

開演中です。居膝るように、密と傍へ寄つて来て、

「小山じゃないか。」

「おお。」

「出ようよ、静に。」

気のどくらしくて、見ていられない舞台だから、誘い手のある引汐に会場を出たのです。

「——何、植物園から豆腐地蔵、不如、菘蕪閻魔にき。煮込んでも、味噌をつけても、浮世はその事だよ。俺もこの頃じゃ、大船一艘、綾錦でないまでも、加賀絹、能登羽二重という処を、船も、びいどろにして、金魚じゃないが、紅、白、ひらひらとした処を、上海あたりへ積出すほどの決心だ。一船のせよう。あいかわらず女の出来ない精進男に、すじか、竹輪か、こつてりとした処を食わせたい。いや串戲はよして、内は柳町、菘蕪閻魔のすぐ傍だ。」

魚頭をつぎ、鱗をふく（宗八の言にありますね。）私窩子でもやってるのじゃないか、

と思つた。風<sup>ふう</sup>がまた似ていました。柳町の裏長屋で……魚頭も鱗もない、黄<sup>きはだ</sup>肌<sup>ぎ</sup>鮪<sup>はだ</sup>に弱つた事は、——前<sup>さき</sup>刻<sup>き</sup>に言つた通りです。

その黄肌鮪<sup>びんなが</sup>だか、鬢<sup>びんなが</sup>長<sup>なが</sup>鮪<sup>はだ</sup>だかと一緒に、悪酒を、なめ、なめ、

「あいかわらず、この体<sup>てい</sup>だ、といううちにも、一昨<sup>さきおとし</sup>々<sup>と</sup>年<sup>ねん</sup>までは、台湾に一艘<sup>いっすぱい</sup>帆<sup>はん</sup>を揚げていたんだよ。ところが土地の有力者が、妻に横恋慕をしたと思いたまえ。そのかなわな腹<sup>はらいせ</sup>癒<sup>い</sup>に、商会对する非常な妨害から蹉<sup>さつ</sup>跌<sup>てつ</sup>没落<sup>ぼつらく</sup>さ。ただ妻の容<sup>きりよう</sup>色<sup>しき</sup>を、台北の雪だ、

「雪」だと称<sup>とな</sup>えられたのを思出にして落城<sup>らくじやう</sup>さ。」

と、羽織を脱ぐと、縞<sup>しま</sup>の女<sup>おんなもの</sup>衣<sup>い</sup>の、振<sup>ふり</sup>が紅<sup>あか</sup>い。ニヤリとしながら、

「お冬、お冬、珍らしい男を連れて来たぞ。誰だ分るか、分るまい。」

薄暗<sup>はくあん</sup>そうな次の間で、人むかえの起居<sup>たちい</sup>の気配<sup>きはい</sup>が、と寂<sup>ひっそり</sup>然<sup>ぜん</sup>やむと、

「お声で分りました。いらつしやるなり。……小山さんです。」

間淵<sup>まぶち</sup>が菟<sup>う</sup>藟<sup>ろう</sup>のような色をして、懐手の貧乏ゆすりです、

「酒だ、酒だ、酒を早く。」

人間どう間違えても、自<sup>うぬぼれ</sup>惚<sup>ぼ</sup>のないものはないとか言います……少くとも私は……人と  
して、一生に一度ぐらいは惚<sup>ぼ</sup>れられる。

無理な酒もすごしました。しかし、帰るまで、それつきり、お冬さんは、顔も姿も見せなかつた。

——先に曳船通、のちに柳町の、そのお冬さん、今は二の橋辺の待合雪の家に居るらしい——白山を訪ねた尼の帰つたあとで、私は、庭の卯の花を見ながら、江戸の名画の雪景色を可懐しく思つたことは、いうまでもありません。

——お聞き下さるようだから続を話しましょう。——  
ところで、その雪の家の胡瓜形の磨硝子の掛つた土間に立つてから、久しくお待ちをせいたしました。

が、しかし待つていたのは、お聞き下さる、あなたではない、私です。南瓜です。は、は、は。

が、待つ間はなかつたのです。小女がすぐに引返し、取次いで二階の六畳——八畳づまりですか……それへ通した。

真中に例の卓子台。で欄間に三枚つづきの錦画が額にして掛けてある。優婉、娜麗、白膩、皓体、乳も胸も、滑かに濡々として、まつわる緋縮緬、流れる水浅黄、誰も知つた——歌麿の蛸女一集の姿。ふと、びいどろの船に、紅だの白だのひらひらする

のを積むといった、間淵洞齋の言を思い出した。……いつては、あれだけの絵師えかきに相濟まないが、かかげてあるのは第何板、幾度かえして刷ったものだから、線も太ければ、勿論厚肉で、絵具も際どいのお察し下さるように。いずれ二三人よんでお附合に一杯、という心づもり。もつとも家内の心づけ、出ず入らずに、なにがしの商品切手というのを、水引で袱紗ふくさで懐ふところ中にして、まじまじ、そこに控えている年配の男をついでにお察し下さるよう——

で、酌人は酌人、ひらひらか、ちらちら、として、さてお肴さかなが、何分刺身はあやまる。……菟藟、菟藟がいい。おでんとしようと、柳町の事を思いながら一方を見ると、歌麿の蜚女と向合つて「発善提心ほつぼだいしん。」という横額かかが掛つている。

亡くなつた洞齋が遣りそうな好みだ、と思うと、床の間の置物が鼻の穴の目立って大きい、真黒な土の達磨だるま。

花活はないけに……菖蒲あやめにしては葉が細い。優しい白い杜若かきつばた、それに姫百合、その床の掛物ほつすに払子ほつすを描いた、楽書らくがき同然の、また悪く筆意を見せて毛はを刎はねた上に、「喝。」と太筆が一字睨にらんでいる。杜若、姫百合の、およそ花にも恥じよ、「喝。」何たるものぞ、これだから、私は禅が。……

はてな、雪の家の、この旦那なるものが変に「喝。」がった難物かも計られぬ。……  
「ああ、はじめまして、あなたが間淵さんの、お嬢ご。」

そこへ、一枚着換えた風俗で、きちんとして、茶を持ってきたのが、むかし、曳船で見  
たお冬さんに肖そっくり如……といううちにも、家業柄に似ず顔を紅うした。そうして私の顔を  
視ると、ちよつと曇らせたような眉が、お冬さんより、顰ひそんだ形なりに迫っています。お母つかさ  
んは、目鼻だちがぱらりとしていたのです。

時宜挨拶がちよつと交されました。

「お父さんは、」

中気、とも言いかねて、

「久しくお煩いだったそうですね。」

「ええ、四年越……」

「それはそれは、何よりご看病が大変でしたね。で、甚だ何ですが、おなくなりになすつ  
たのは、此家こゝらで。」

「はあ、あの病気の発おこりましたのは内だったんですけれど、こんな稼業でしょう、少しは  
身体からだを動かしてもいいと、お医師いしやがおつしやいましてから、すぐ川崎の方へ……あの、知

合の家が広うございますもんですから、その離室のような処へ移しましたんですの。」

——喝旦那の住居らしい……とするとお冬さんは、そっちで暮してはいはしないか。逢えない仕儀であろうも知れない。——またお察しを願うとして——実は逢いたかった。もつとも白山へ来訪をうけた尼刀自へ返礼に出向いたのに、いつわりはないのですが、そんな事はどうでもいい。また妙に、その尼にも、いま差当って娘にも、お冬さんの消息が、さそくに口へ出なかつた、そのわけは、前述の「魔道伝書」を見ない方には、お解りになりますまい。怪しからん事であります。

「何にしましても病気が病気だもんですから、あせりにあせり抜いて、気ばかり荒くなりましてね、傍を困らせ抜きますうちにも、あの病気に限って、食べものの難題ですの。ええ、一番困りましたのは毎日見ます新聞の料理案内と、それにラジオのご馳走の放送ですのよ。鴨、鳥はいいとして、山鳥、雉子、豚でも牛でも、野菜よし、魚よし、料理に手のかかつたものを、見ると、聞くと、そのまんま、すぐ食わせる、目の前へ並べろでもって、口が利けましただけになお不可ません、少しも堪忍をする気はなし、その場即座について、間に合わない、殺すか、ほし殺せなんですもの……どんなに母を泣かせたでしょう、小父様。」……

私は吐胸とむねをつきました。どんな意味でも、この場合の「おじさま。」は身に応えた。今度はこつちが赤面して汗になった。

「魔法でもつかわないじや、そんな事は出来ません。」

その際、秘伝書を手に入れようという、深き慮おもんばかりがあるものなら、もっと辛抱をしたでしょう。せき心で、お母つかさんはと、初めて聞くと、少々加減が悪くって、というんです。川崎とすればもとよりの事、この家やに居た処で、病氣だといえば……と思うも遅い。既に「おじさま。」と聞いた時、もう私は居たたまらなくなつたのです。

発菩提心！……向むかい合あつた欄干レイドロの硝子ビイドロの船に乗つた美女の中には、当世に仕立てたらば、そのお冬さんに似たのがたしかに。ああ発菩提心！……額の下へ、もそもそ不手際に、件の紅白水引を、端くだんづくろいに、ぴんと反そらして差置いて、すぐに座を開くと、

「まあ、おじさま。」

いかにも案外と、本意ほんいない様子で、近所へ療治を頼まれて行っている、いまにも帰るでしょう。姨おばがという。尼刀自の事です。お顔を見たら、どんなに喜ぶか知れませんが。女中も迎いにしました。ちよつと様子を、と襖ふすまを抜けるように、白足袋で、裾すそを紅入べにいりに二階を下りた。

間数もなさそうですが、居馴染いなじまない場所は、東西、見当みあたが分らない。十番はどつちへあたるか、二の橋の方は、と思うと、すぐ前を通るらしい豆府屋の声も間遠まのちに聞え、窓の障子に、日が映さすともなく、翳かげるともなく、漠ぼくとして、妙に内うち外そとが寂然ひっそりする。ジインと鉄瓶の湯の沸く音がどこか下の方に静しずかに聞え、ぎぶんと下屋げやの縁側えんがわらしい処で、手水ちようず鉢ばちの水をかえす音が聞える。いい年増、もう三十七八になろうかしら、お冬さんが寢床ねどを起きて出たのではないか、こんな時、厠かわやのあたりに、けはいがするといふものは、何だか、人影が幻に立つような気がするものです。

喝！ ああ驚いた。掛けものめ。

「あつ！ ははは。」

いきなり、男のように笑いかけて、

「驚おどかそう思うて、わざと、こつそりと上つて来たぞに。心易こころやす立てや。ようこそ、ようこそ、こんな処まで、嬉しいこつちや。や、もう洞齋兄の事や、何の事や、すぎ去つた。そんな挨拶はさらりとおくこつちや、にい。縁あればこそ、生あればこそ、北と南と、何十年分れたものが訪といつ訪われつ、やぞに。それに、そういう行儀は何じや、袴はかまはいたり、膝にお手々をちやんとついたり、早や、その手をぬいと伸ばいて、盃さかずきを持つ格好に、のう

人に口は利かせない。被布から皺しなびた腕を伸ばして、目八分に、猪口ちよこをあげる指形で、「何とかいうたに、それ、それ、乾盃、あれに限るぞに、いい事じゃ。洞齋兄は沢山たんとは飲まなんだけれど、島田鬻の妹は少し飲やるがやぞ。これでもに、古馴染や、遠慮はない。それにどこへ来なされた思うて、そのように堅うして。……花柳界、看板を出した待合や。さ膝を崩くいて、楽にござつて、尼かてこの年、男も同然、胡坐あぐらを搔かいても人は沙汰せん。それに袴はかまはいとるぞに。」

また高笑いで、

「……そこで念のため云うておくのですが、内証話をあけすけなが、あんたも世間が解つておいでや。寸法とかいうもんで、ここへ来ての以上、一口、酒となれば、芸妓げいしやも呼んでやろう、それ、ちゃんとその了りよう簡けんは見えてある。なれど、それはさせんぞ。今日だけは、こちらへ万事まかせてくんされ、別懇のお附合や。そのかわり、わざと芸妓は呼ばん。尼が相手あいてして、姪めいがお酌しやくやて、辛抱ものや。その辛抱ついでにな、お肴さかなもありあわせやぞに。惣菜そうさいさながらの。」

いよいよ口を利かせません。立つにも立たれはしないから、しばらく腰を据える覚悟を

しました。が、何分にも、餒れた黄肌鮪鬚長鮪が可恐しい。

「菘蕨。」

「こんにやく。」

口の裡でむぐむぐ言ったのが耳へ入ったか、聞返されて、驚いて、

「卯の花なぞが結構です。」

また、うっかり、下の縁側を卯の花が、葉を搦んだ白い脚が、寝衣の裳を曳いて寝みだ

れ姿で寢床からと……その様子が、自分勝手の胸にあつた。ただし、他家様のお惣菜を、

豆腐殻、は失礼だ。

「たとえばです。」

「お好きか、なんぼなど、内で間に合う、言いつけようでに。さ、もう、用意はしておつ

たが、お燗の望みは熱いのか、ぬるいのか、何せい、程のいい処。……もう出来たろうに、

何しとるぞ。」

と、手をたたたく。

「はいいい。」

返事は下でお極りの、それは小女か女中かで、銚子、盃、添えものは、襖が開いて、

姪——間淵の娘の手で、もう卓子台ちやぶだいに並んだのでありました。

さて、お盃。なかなか飲める。……柳町で悩まされた子ぼうふら子が酔いそうなものではなかつた。

「お孝、お孝。」

と若いかみさんの、姪を呼んで、

「重ねて、それ、お酌をせんかの。……何をぼんやり……あなたの顔を見とるがや。……電燈もつけて。」

その燈あかりに、お孝が、……若いかみさんの飲まない顔が、何故か、耳元まで紅かつたのです。

「これがほんの水入らず、にい。そういえば、お對手あいては、姪、尼でもや、酒だけは黒松の、それも生一本やで、何と、この上の町、ここでの名所、一本松というてもいいやろ。」  
と尼刀自しが洒落しやれた。が、この洒落しやは悪にくくない。

「ああ、そうじゃ……あなたの故郷くににもおなじ名の名所があつたに——一本松——

……忘れもせんぞに、私わしが十三か四の頃や、洞齋兄あにさえ、まだ、尾山（金沢を云う。近国近郷の称呼。）の、あなたの家うちへ寄宿せぬさき、親どもに手を曳ひかれて、お城下の本願

寺、お末寺へ参詣した時、橋の上からも、宿の二階からも、いい姿に、一目に見はらされて今でも忘れはせんのだが、その昔、あすこに心中があつたそうやに。」

「……聞いています。」

「その心中に、くどき、くどきや、唄があつて、あわれなものやが、ご存じですやろ。」

「いや、いいえ知りませんよ。」

私はまるつきり知らなかつた。

小山直槇は、時に盃をあらためて、

「私は、まるで知らなかつた——同郷です、あなたは大方、ご存じでしょう。」と云つた。  
筆者わたしも更に知らなかつた。

「ちつとも知りません。聞いたこともありません。」

「妙ですな、お国ものが誰も知らないで、隣りの能登の田舎の方で知っている。もつとも、その時、間淵の尼の話した処では、加賀の安宅あたかの方から、きまつて、尼さんが二人づれ、毎年のように盃うらぼん盆の頃になると行脚をして来て、村里を流しながら唄つたので、ふしといい、唄といい、里人は皆涙をそそられた。娘たちは、袖を絞つたために今もなお、よく

その説句もんくを覚えていると、云つて聞かせました。心中の命は卯辰山に消えたが、はかない魂は浮名とともに、城下の町を憚はばかつて、海づたいに波に流れたのかも知れません。——土地に縁のある事は、能登屋仁平にへい、というのです。いや、不義ゆえの心中の、それは年とつた本夫で、その若い女房と、対手あいてが若年の侍です——

——是非と望んで、これは私が聞きました。尼婆さんの他ほかの饒舌おしゃべりには弱らされたが、これだけは、もう一度、また一度と、きかせて貰つた。調子に乗ると、手拍子が張扇子はりおうぎになつて、しかも自己流の手ごしらえ。それでもお惣菜の卵の花だ、とお孝の言訳も憎くない。句切だけぐらいだけでも、娘の鼓の手が入つたのです。が説くぞ、説きます、という尼婆さんの口説節くどきぶしが、あわれに、うらがなく、昔なつかしく、胸にしみて、ぞくぞく心を揺ゆつて、その癖、一本松が、かつと血を湧わかして、火のように酔よつて行く。

さんざ浮かれた折ばかり、酔いしれるとは限りません。はかない、悲しい、あるいは床しい、上品な唄、踊、舞を見て、魂とともに、とろとろに酔よつて行く。……あの体かたちで。……あでやかな鬼の舞を視みながら、英雄が酔よつぱらつた例もあります。いや、いつかの間淵の話じゃないが、蟻の細工までも到らない、箸けずりの木彫屋が、余五將軍をのみなまに引込んだ処は、私も余程よっぽど酔よいました。——ま、ま、あなたへ、一杯ひとつ。」

閑静な席で、対坐に人ませせぬ酒の中に、話がここへ来たころは、その杯を受けた筆者も酔が廻った。この筆者の私と、談者の私と、酔った同士は、こんがらかつても、修理を捌くお手際は、謹んで、読者の賢明に仰ぐのである。

## 七

「何、唄をお聞きになる、よろしい、ヤツつけましょう。節なしに……もつとも、節をつけては大変だ。……繰返して、聞いたから、そこ、ここうろぬきながら覚えていきます。——恋とサア、というくどきです。

恋とサア情のその二道は、やまと、唐土、夷の国の、おろしや、いぎりす、あめりか国も、どこのいづくも、かわりはしない。さても今度の心中話。それをくわしくたずねて見れば、加賀の城下のその片畔、能登屋仁平が、

これです、年とつた亭主というのは。——

女房のおとせ、年は二十一 愛嬌盛り……

ちよつと娘が気になりますね。鼓をうつてる……年もちょうどそのくらい。

いつの頃から夫に忍び、その名岩島友吉こそは、年も二十六、やさがた生れ、きりよう好い（よ）のについ誘（ひ）かされて、人目忍びて逢う瀬の数も、……

——阿漕（あこぎ）が浦（たぎ）の度（たび）かさなれば、おさだまりで、たちまち近所（ちかところ）となりのうわさ、これも定まる処（ところ）です。

夫（おんど）仁平（にへい）は穩厚（おんこう）な生れ、かつと燃立つ胸（むね）なでおろし、それが素振（そぶり）は顔（かほ）へも出さず……

……  
いいか、悪い（わる）か、分（わ）りませんが、金沢（かねざわ）ものだ、仕方（しほう）がない、とにかく杯（さかづき）を合せましょう。で、何（なに）しろ、かように親類（せんとく）縁者（えんしや）までの耳（みみ）へ入（い）るようになっては、世間（よこしま）へ済（す）まぬ。今はこれまで、暇（いとま）をくれよう、どんな夫（おんど）を持（も）とうとも、そうなれば仔細（しさい）はないと、穩厚（おんこう）人（ひと）、出方（でかた）がまことにおとなしい。……もつとも、

そち（あなた）がこの家（や）へ来（き）たそのはじめ、わずか年（とし）さえ二七（にじゅうしち）の春（はる）よ、思いまわせば七年（ななとし）以來（いらい）……  
来（き）……

……  
というのです。二七（にじゅうしち）の春（はる）——私（わたし）はまた……曳船（えいせん）で見た（み）た、お冬（ふゆ）さんのそのころの年（とし）を思（おも）つた、十五（じゅうご）六（ろく）——

……  
いえばおとせは顔（かほ）赤（あか）らめて、何も（なんにも）いわずに恥（は）し姿（すがた）。五年（ごねん）六年（ろくねん）、年（とし）つき日（ひ）ごろ、か

わい、かわいと、撫なでさするまで、情なさけわすれた不義なまじいたずらを、ぶつか叩くか、しもしようことを、すいた男を添みよわせてやると、かかる実意みよな夫をすてる、冥みよ利りすぎます、もつたいなさに、天あまの冥みよ加がも、いと可おそ恐そしい。せめて夫へ言い訳やくのため、死んでおわびは草葉くさばの蔭かげと、雨あめに出て行くゆ夜空よこやの涙なみだ……

それから屋敷町の暗夜やみへ忍しのんだ、勿論もちろん、小祿せきろくらしい。約束つづの礫つぶてを当てると、男が切戸きこから引込んで、すぐ膝ひざに抱かかり、泣伏なみだす場ば面めんで、

そなた一人をあの世へやろか、二人ならでは死なせはしない、何なにの浮世うきよはただ仮かりの宿しゆく、どうで一度は死なねばならぬ、死んで未来みらいで添みよ遂すいげようと、いえば嬉うれししやなおさら涙なみだ。さらば最期さいごとかねての用意ようい、女肌によには緋ひの帷かた巾びらに、上うへは单衣ひとえの藍あ  
紺いこん縞しまよ、当世とうせはやり……

その頃の派手はでらしい藍紺あゐ縞しま——これを最初に唄うたった時とき、尼婆にばさんは、当世とうせはやりの何なにと  
か、と高々たかたかとやりながら忘れていた。ちようど、お孝おこうが銚子しやうしのかわりめに立たった時ときだつた  
のです。が、尼婆にばさんの首くびを捻ひねる処ところへ上あつて来きて、

当世とうせはやりの黒くろ縞しま子この帯おび……

と言い継ついだ。ちよいちよい唄うたうらしい、尼婆にばさんの方かたで忘わすれた処ところを、きき覚さえのお孝おこうが

続けたのですが、はて、……呉紹服綸ではなかったか、と尼婆さんはもう一度考えました  
が、

……黒繻子の帯、二重ふたえまわして、すらりと結び、髪は島田の笄こうがい長く、そこで男の  
衣裳と見れば、下に白地の能登のちじみおり縮ちぢみ上は紋つき薄色一重、のぞき浅黄のぶツ  
裂羽織さきぼおり、胸は覚悟の打紐うちひもぞとよ、しゃんと袴の股立ももたちとりて……大小すつきり  
落しにさして……

——飛んでもない、いや、串じょうだん戯あそびじゃない、何がしゃんと、股立です。のぞき浅黄の  
ぶツ裂羽織が事おかしい。熱くて脱いだ黒無地のべんべら紹ろが畳たたんであった、それなり懐ふ  
中とこへ捻ねじ込んだ、大小すつきり落しにさすと云うのが、洋杖ステッキ、洋杖です。あいつを左腰  
から帯へ突出してぶら下げた形といつては——千駄木の大師匠に十幾年、年期を入れた、  
自分免許の木彫の手練でも、洋杖は刀になりません。竹篋たけべらにも杓しゃくし子こにもならない。蟻  
にはもとより、蕪かぶにならず、大根にならず、人参にならず、黒いから、大まけにまけた処  
が牛蒡ごぼうです。すなわち、牛蒡丸ぬきやす拔ぬきやす安の細身の一刀、これをぶら下げた図というものは、  
尻尾しつぽじゃないが、十番越に狸まみあな穴あなから狸まみあなに化かされた同様な形です。

ああ、しかし、こういっても——不思議ともいふべき、めぐり合せて、その時、一つ傘からかさ

で連立っていた——お冬さんを、おなじ化され夥間だと思われては情ない。申訳がないのです。

酔っています。だしぬけにこんな事をいつて、確に酔っている。私は息が忙込みますが、あなたはどうぞ静にお聞き下さい……」

——ちよつと呆氣に取られたが、この言葉で、筆者は静に聞いていた。

「話は前後しましたが、が、この既にお冬さんの一つ傘に肩を並べた時は、何だか、それなり一本松へ心中に出掛けるような気がしたんですから——この面や格好を見ては不可ません。」

直槓は寂しく笑った。

「まあ、しかし忘れぬうちに、唄のあとを続けてからにしましょう。——大小すらりと落しにさして、——という処で、前後しました……」

ここで死んでは憚る人目。死出の山辺に燈一つ見える、一つ灯にただ松一つ、一本松こそ場所 屈 竟と、頃は五月の日も十四日、月はあれども心の闇に、迷う手と手の相合傘よ、すぐに柄もりに袖絞るらむ。心細道岩坂辿り、辿りついたはその松の蔭。かげの夫婦は手で抱合うて、かくす死恥旗天 蓋と、蛇目傘開いて

肩身をすぼめ、おとせ、あれあれ草葉の露に、青い幽な螢火一つ、二つないのは心にかかる。されど露には影さすものを、わたしや影でも厭いはせぬと、縫るおとせをまた抱きしめて、女房過分な、こうなる身にも、露の影とは、そなたの卑下よ、消ゆるわれらに永劫未来、たった一つの光はそなた。さらば最期ぞ、覚悟はよいか、いえばおとせは顔ふりあげて、なんの今さら未練があろう、早う早うと両掌を合わす、松もかつ散る氷の刃……

つらつら思うに、心中なぞするもんじやありません、後世には酒の肴になる。いや怪しからぬ、いつまで聞いていようというんだ。私は心で叱りました。——

「——ありがとうございます……厚くお礼を申上げる……唄と、馳走のお厚情、かさねて、ご挨拶を。これで、失礼——心なく、思わず長座をいたしました。何だか帰途に一本松が見たくなりました。」と、機に起つと、

「わけないぞに、一緒に行こうかに。」

慄悚とした、玉露を飲んで、中気薬を舐めさせられた。その厭な心持。酔も醒めたといううちにも、エイと掛声で、上框に腰を落して、直してあった下駄を突っかける時、  
「ああ月が出た。」

と壁の胡瓜を見たんですから、ちらつくどころか、目も磨硝子すりがらすで、ゆがんでいた。処へ、ざつと雨が来ました。土間の鉢植が、土と一所に湿つぽく濡々と香におう。

「お孝や、いいんだよ。私がお送り申すから。」

すぐ傍わきで——いま、つい近い自動車まで、と傘を手にして三和土たつきへ出た娘を留めて——優しい声がすると、酒の勢いきおいで素早く格子戸を出た、そのすぐ傍です。切戸が一枚、片暗がりにツイと開く。鉢植でもあろうと思う、細い柳の雨に搦からんで、細い青々とした、黒塀へ、雪が浮いたように出たんです。袖に添えた紺蛇目傘じやのめがざつと涼しい、ろくろの音で、

「さあ、どうぞ。」

一かげり翳かげつた下へ、私は頭は光らないが、小さな蛍のようにもう吸込まれた。送つて出たお孝が紛れ込むように、降り来る雨に、一騒ぎ。そこらがざわめく人の足音、潮時の往來ゆききの影。その賑にぎやかな明るい燈ひの町へ向わずに、黒塀添いを傘で導く。

死出の山辺の灯一つ見える、一つ灯ともしに松ただ一つ、一本松こそ、場所屈竟と、頃は五月の日も十四日、月はあれども心の闇に、迷う手と手の相合傘よ、すぐに柄むすもりの袖絞むするらむ……

被布ぬきえもんの抜衣紋ぬきえもんで、ぐたりとなつた、尼婆さんの形が、散らかつた杯盤の中に目に見え

るようで、……二階でまだ唄っている。

「お危うございますよ、敷石に高低がありますから。」

「つんのめ つても構やしません。」

「あんなこと。」

「そうすれば、おすが継り申す。」

「おほほ。」

「しかし、いいんですか。……失礼ですが、お冬さん……ですな。」

横顔で莞爾にっこりしたようで、唇が動いたが、そのまま艶々つやつやとした円鬚まるまげの、手柄てがらの浅黄を薄く、すんなりとした頸脚えりあしで、うつむいたのがうなずいた返事らしい。

「……ほんとうにいいんですか、病気だつていうじやありませんか。」

「ぶらぶらしてはいましたけれど、よもや、こんな処へなぞおいでなさはしなかりうと思つておりましたのに、真実しんそこ嬉しゅうございますわ。」

「私も嬉しいんです。」

何だか声が掠かすれている。

「まあ、お世辞のいいこと。でも、いま、名をおっしゃられて震えましたよ。とても覚え

てなぞお在いでなさらないと存じました。けれど、それでもお目にかかりますのに、余り取乱していたもんですから、急にあの髪結さんと呼んで、それから湯へ入ったりなんかして……ついお座敷へ伺いますのが。」

夜目にも湯上りの薄化粧と、見れば一層びん鬢が濡れて、ほんのりした耳元の清らかさ。それに人肌といいですか、なつかしい香が、傘を打つしと雨に、音もなく揺れるんです。「卯の花。」

慌てて、言いそらして、

「曳船を、柳町を思い出します。」

「ねえ、お久しい……二十……何年ぶりですか。私は口不重ぶちようほう宝で、口に出しては何にもいえはいたしません。」

「何をです。」

「いいえ、いいんです。」

「おつしやい、云つて下さい、そうでないと、狸になって、あなたの傘を持った手に、もじゃ、もじゃ。」

「あれ。」

「触りやしない。触りやしないが、ぶら下りかねないというんです。いつて下さいよ。」

「ただね、あつかましいんですけど、片時も忘れはしませんと申す事。」

「ご同然……」

「……」

「以上です。」

「……」

「お冬さん」

「……」

「口をおききなさらなければ毛だらけの手が。」

「それこそ、狸たぬちゃんでいらつしやる。」

「ええ、狸。」

「私をおだまします。」

「はぐらかしちや不可いけいなあ、時に、路地を出ましたね。」

下駄がしとつて、燈ひが流れる。

「構ありませんか、こんな事をして歩行あるいでいて。」

「里うちですもの、お互に廊下で行逢うもおなじですわ。」

私は酒の胸がわくわくした。

「ところで、自動車の、あります処は。」

「手前どもの、つい傍そばだったんでごぎいますけれど、少し廻まわり道みちをしたんですよ。大それた……お連れ申して歩行あゆるいて済みません。もう直きそこにごぎいますから。」

「そりや、そりや困る、直きそこじや困るんだ。是非大廻りに、堂々めぐり、五百羅漢、まんじどもえ

巴まに廻まつて下さい。唐天竺からてんじくか、いや違ちがった、やまと、もろこしですか、いぎりす、あめりかか、そんな、まだるっこしいことはおいて、お願いです、二の橋か、一本松へ連れてって頂たまきたい。」

「いらつしやる。」

お冬は軽たやすく佇たたずみました。

「ほんとうに。」

「勿論、一緒に行つて下さるんなら。ご迷惑？」

「いいえ、嬉しいんです。でも、まだお目にかかりませんけれど、奥様にお悪くはないでしようか。」

「名所古跡を尋ねるのは、堂寺まいり同然です、構やしない。後生ごしやうのためです、順礼に報謝ほうしゃのつもりで——ああ、そうだ亀井戸だ。——お酌しやくというのが贅ぜい沢たくなら、あなたの手から煙草たばこをのまないじや帰らない、いつそお宅へ引返ひっかえすか。」

「それは、でもあの尼が、あなたのお座敷へ出ますのを喜びませんような様子が見えます。」

これはそうらしい。でなくつても、あの顔は見たくない。またいかに何でも、ほかの待合まちあひなぞへとは言いかねました。もつともそのまま別れる気はない。処ところへ自動車くるまが見つかった。

弱よわつた、一応は声をかけなければ済まない。

「ああ、柳町へ来ましたね。」

ちようど人丈三つばかりなのが、雨に青い蓑みので立たつていて、その傍わきに空地を控え、おでん屋おでんやが出ていました。

「またおもしろい出でします、難ありがた有たい。」

傘かさの中から面つらと肩かたを斜はすつかいに、つつかかるように暖簾のれんの中へ突出して、

「や、お閻魔殿えんま、ご機嫌きげんよう。」

「一口にがアぶり、えヘツ、ヘツヘツ、頭から塩という処を……味噌にしますか。」

「味噌は、あやまる。からしにしてくれ、こん菘にやくだ。」

「掛声はありがたいが閻魔はひどろがす。旦那、辻の地藏といわれます、石で刻んで、重こ味があつても、のつぺりと柔い。」

「なるほど。」

「はんぺんのような男で。」

「はんぺんは不可いけない、菘蕪だ。からしを。」

「ご酒は……酒はそれこそ、黒松の生一本です。」

「私は、何だつたつて、一本松だよ。」

傘に葉ずれの音がします。うしろから柳の寝ン寝子を着せ掛けられるような気がして振向くと、一つに包くるまったほど、小雨もほの暖く湯上りの白はだい膚だが、単衣ひとえを透通るばかり、立っている。

「おお、こりや、雪の家の、ご新しんぞ姐。」

待合の女にようぼ房ぼを、ご新姐という。娘のおかみさんがあるのに対してだ、と思われた。

あとで解つた事です。――

お冬は武家の出で、本所に落魄おちぶれた旗本か、ごけにんの血を引いている。煮豆屋の婆ばばあが口を利いて、築地辺の大会社の社長が、事務繁雜の氣保養に、曳船の仮の一人ずみ、ほんの当座の手伝いと、頼まれた。手廻り調度は、隅田川を、やがて、大船で四五日うちの中に裏木戸へ積込むというので、間に合せの小鍋こなべ、碗わん家具、古脇息ふるきょうそくの類まで、当座お冬の家から持運んでいた、といひます。その折に、雲原明流先生の内弟子、けずり小僧が訪ねたのです。

それこそ、徳川の末の末の細流は、淀よどみつ、濁りつ、消えつつも、風説ふうせきは二の橋あたりへまで伝わり流れて、土地のおでん屋の耳から口へ、ご新姐であつたとも思われる。

ついでに、

——曳船の時、お十九でいらつしやいましたね、そのあんたの前で、間淵洞齋が頼杖ほおづえをつきながら、十五の私を、おれの女房だと、申しました。それツきり、私は世の中を断あ念きらいめました——

肌身は、茶碗の水と一緒に、その夜よ、卯の花のように、こなごなに散つた、と言うのを、やがて聞くことになりました。

それも、これも、私が魅ばかされたのかも知れない。間淵に、例の「魔道伝書」がありまし

よう。女房に相伝していないと言われますか——お聞きになれば分るんですが。

「何を差上げます。ご新姐さん。」

うしろの空地に、つめ襟の服と、しるし半纏、人影が二つ三つさして来た。

「私は……」

「しばらく、お見かけ申しません。」

「ご病気だった。それだもの、湯ざめをなさると不可い。ちよこ猪口でなんぞ、コツプ硝子盃だ、硝子

盃。しかし、一口いかがです。」

「では。わざと一つだけ。」

で、硝子盃から猪口へ通わせる。何を通わせるんだか、さながら手品の前芸です。酔方

をお察し下さい。

「ご勘定、いいんですよ。」

「よくはありません。」

「私におまかせなさいまし。」

「実はおまかせ申したいんです。どぶ溝へうちや打棄らないで、一本松へ。」

「はあ、それはご趣向。あとで、かごお駕籠でお迎いに参りましょう。」

「棺桶かんおけといえ、お閻魔殿。——ご馳走でした。……お冬さん、そこで、一本松までは遥は々るばるですか。」

「ええ、ええ、遙々……ここから小石川柳町もつと、本所ほどもありましようか、ほほほ——そのの(ぞうしき)から直ぐですわ。」

「そいつは、心中を済ましたあとです。」

「まあ、(ぞうしき)という町の名。」

「これは失礼。」

と、明あかるい町に、お辞儀をして、あの板の並んだ道を、船に乗ったように蹠よろよろ蹠よろした。酔っています。

「交番がありますから、裏路地を。」

「的実、ごもつともです。」

「ね、暗うございますから、お気をつけなさいませよ。」

「おお、冷い。……おん手を給たまわる、……しかし冷いお手だ。」

「済みません。冬も寒の中うち、指は霜の柱ですわ、こんな身体からだで。」……

「飛んでもない、私から見ると(二十一)だ。何でしたっけ、何だっけ……(年紀は二十

「愛嬌盛り。」……」

「あれ、危い、路が悪いんですから、そんなにお離れなすつては濡れますよ。」

「心得た、（しゃんと袴の股立とりて。大小すらりと落しにさして。）……」

——ここです。濡れに寄るにも、袖によるにも、洋杖は溢出しますから、件の牛蒡

丸拔安です。それ、ばかされていきましょう。ばかされながらもその頃までは、まだ前後

を忘却していなかった筈ですが、路地を出ると、すぐ近く、高い石磴が、くらがり、灰

白い。深々とした夜気に包まれて階子のように見えるのが、——ご存じと思います。——

——故郷の一本松の上り口にそっくりです。

段の数はあるが、一も二もなく踏掛けた。

あたりに人ツ子一人なし、雨はしきる、相合傘で。

「——いよいよ道行です、何でしたっけ……」

さらば最期のかねての覚悟。

女肌には緋のかたびらに、上は単衣の藍紺縞よ……

でしたかね。」

という時、ふと見ると、おでん屋の燈でも、町通りでも気がつかなくった。暗夜の幻

影、麻布銀座のあかりがさすか、その藍と紺の横縞の、お召……ですか、その単衣に、縹子ではないでしょうか、黒の織物に、さつきの柳の葉が絡つたような織出しの優しい帯をしめている。

——生霊か、死霊か、ここでその姿が消えるのではないかと、聞いている筆者は思った。さきに「近世怪談録」を見ているほどだから、その浅草新堀の西福寺うらの若侍とおなじく、横路地で冷たい手、といった時、もう片手きかないほどに氷つたのではないか、と危なく、横路地であつた。

「……やさしい、すずしい帯でした。」

女肌には緋のかたびらに……

が、それが、なよなよとした白縮緬、青味がかつた水浅黄の蹴出しが見える、緋鹿子で年が少いと——お七の処、磴が急で、ちらりと搦むのが、目につくと、踵をくびつた白足袋で、庭下駄を穿いていました。」

——筆者はその時、二人の酒席の艶かな卓子台の上に、水浅黄の棲を雪なす足袋に掛けて、片裾庭下駄を揚げた姿を見、且つ傘の雫の杯洗にこぼるる音を聞いた。熟と、ともに天井を仰いだ直槓は、その丸髻の白い顔に、鮮麗な眉を、面影に見たらしい。——

熟<sup>じつ</sup>ど、しばらくして、まうつむけのように俯<sup>うつむ</sup>向いた。酔<sup>よ</sup>っている。

「や、あなたは庭下駄を穿<sup>は</sup>いていますね。」

吃<sup>びっくり</sup>驚<sup>おどろ</sup>して私が云<sup>い</sup>った。

「いっそ脱<sup>は</sup>ぎましょうか。」

「<sup>はだし</sup>跣<sup>はだし</sup>足<sup>あし</sup>になる……」

「ええ。」

「覚<sup>さ</sup>悟<sup>ご</sup>はいいんですか。」

「本<sup>ほん</sup>望<sup>ぼう</sup>ですわ。」

「一本<sup>いっぴん</sup>松<sup>しょう</sup>へ着<sup>き</sup>いてから。」

「ええ一本<sup>いっぴん</sup>松<sup>しょう</sup>へついでから。」

「一緒<sup>いっしょ</sup>に草<sup>くさ</sup>葉<sup>は</sup>の虫<sup>むし</sup>を見<sup>み</sup>ましょう。」

「是非<sup>ぜひ</sup>どうぞ。」

「そこまでは脱<sup>は</sup>がせません、玉<sup>たま</sup>散<sup>ち</sup>る刃<sup>やいば</sup>を抜<sup>ひ</sup>く時に。」

が、例<sup>れい</sup>の牛<sup>ぎゅう</sup>蒔<sup>ま</sup>丸<sup>まる</sup>の洋<sup>やう</sup>杖<sup>じょう</sup>で、そいつを捻<sup>ひね</sup>くった処<sup>ところ</sup>は、いよいよもって魅<sup>つま</sup>まれものです。

——さて、その一本松です。夜目に見て、前申した故郷の松にそのままです。一体、名所の松といえ、それが二本松、三本松でも、実際また絵で見なくても、いい姿はわかるものです、暗夜の遠燈の、ほの影に、それに霽をかけた小雨なんです。

——ああ、まだあすこをごろんにならない。——実は私もその夜がはじめてで。

事情あつて、その後も、あの一本松、また寺の石磴のあたりまでは参りましたけれども、石磴を上ったつて松も何もありません。磴は横です。真向うに、その夜、真暗な上り道がありました。一本松はその上なんです。石磴は、のぼると、……寺なのを、まつた。くその時は知らなかった。のみならず、お目にかけていくらい、あの石磴は妙です。あたりに何にもない中に立っているから、灰白ほのしろい空の階子はしごのようで、故郷の山道に似た処から、ひとりぎめに、私が先へ踏掛けた。ついて上ったのは、お冬さんなんです、どうでしょう。庭下駄で捌さばく褌つまなまめの媚なまめかしさが、一段、一段、肩にも、腰すそにも添そって、上り切ると、一本松が見えたから不思議なんです。

「風はないのに、松の匂においが襲おそうと一緒いっしょに、弱い女の肌の香が消えそう。……実際身でしめ、袖で抱きたかった。

心細道、岩坂たど辿り、辿りついたはその松の蔭、

……その一本松よき死場所と、

かげの夫婦は手で抱合うて……

それから何でしたつけ。」

お冬が、

「……かくす死恥……ですわ、そんな、唄、うたつてかまいませんか。

かくす死恥旗てんがい天蓋に、蛇目傘じやのめ開いて肩身をすぼめ……

あれ、お燈とうみょう明が、石燈籠に。

おとせあれ見よ、草葉の露に、青い幽迷かすかな蛍火一つ……

蛍のようですわね。」

「お燈明。」

「ええ、ねえ、ごらんなさい、この松には女の乳を供えるんです。」

「飛んでもない、あなたの乳なぞ。……妬やける、妬けます。」

と云った。……乳とただ言われただけで、お冬さんの胸が雪白に見えるほど、私の目が、いいえ、お冬さんのという言葉が、乳にかぎらず、草といえ、草、葉といえ、葉、露は、露、蛍は、蛍、燈明が燈明に見えたんです。何よりも一本松が一本松に、ありありと夜中

に見えたんですから化<sup>ばか</sup>されていたに違いありません。いやそれ以上、魔法にやられていたのです、——「伝書」をお忘れになりますまい。ところで、唄の忘れた処は、その胸に手をあてて、お冬さんが思い出しては、つけてうたつて、聞かせました。

「あの、……（わたしや蔭でもいとはせぬと、<sup>すが</sup>縋るおとせ）……何ですか、もんくでも私の口からだとあつかましい。」

「それはこつちでいう事ですが、何でしたっけな……縋るおとせをまた抱きしめて……

……縋るおとせをまた抱きしめて、女房過分な、こうなる身にも、露の影とは女の卑下よ、消ゆるわが身に永劫未来、たった一つの光はそなた。

あ、お燈明が、蛍が消えた。」

手を取りました。

「私も消えとうございますわ。」というのです。

——（同好の怪談は、ここでお冬さんが幽霊になって消えるのか、と筆者<sup>わたし</sup>はまた思った、が、そうではなかった。）——

「私も消えとうございますわ。」

と、お冬さんがいった時です。松をしぶいて、ぎつと大降りになった。単衣<sup>ひとえ</sup>の藍<sup>あゐ</sup>、帯の

柳、うす青い褌、白い足袋まで、雨明りというのに、濡々と鮮明した。

「傘では凌げません、雨宿りに、この中へ消えましよう。」

と、その姿で……ここは暗闇だ。お聞きになるあなたの目に、もう一度故郷の一本松を思い浮べて頂きたい。あの松の幹をです。立上りはしないで、傘なりに少し屈腰になつて、その白い手で、トンと敲いたと思うと、蘭燈といひますか、かさなり咲いた芍薬の花に、電燈を包んだような光明がさして、金襴の衾、錦の褥、珊瑚の枕、瑠璃の床、瑪瑙の柱、螺鈿の衣桁が燎爛と輝いた。

覚悟をしました。たしかに伝来の魔法にかかった。下司と、鈍痴と、劣情を兼ね備えた奴として、この魔法にかからずにはいられますか。

その上に大酔悩乱です。——一度はいつか、二日酔の朝、胸が上下に跳上り動悸をうつと、仰向けに寝ていて、茶の間の、めくり暦の赤い処が血を噴いた女の切首になつて飛上り飛下りしたのを忘れない。それにもました惑乱です。

のめり込んで、錦爛の裡にぼかんとすると、

「一口、めしあがりますか。」

「何の事です、それじゃ狒々の老耄か、仙人の化物になる。」

と言つたんだから可恐おそろしい。

狸まみあな穴の狸じやないが、一本松の幹の中へ入つた気で居て、それに供えるという処から、入りしなに壇びんに詰めた白いのを、鼻はな頭で搔さ分さきけたつもりで居る。それが朦朧もつろうとして、何だかお冬さんの懐の中へ、つまみ込まれたようだったものですから。……何にしる魔法にかかった、いよいよ魔法に掛かつたに相違ない。一口、というのさえ酒でなしに、魔法に限りません、かかり切りになつていりや申分はありません。」

といつて、肩のめりに、ぐつたりと手を支ついた。

この獅子屋ししやさん、名も直槓ちかが、くなくなになつたから、余程よつほどおかしい。

いや、話は可笑おかしいのではないのである。

## 八

「御加護、たまわれ。」

.....

——さて、かくて、曳船の卯の花の時の事、後あとに柳町の折としては、着て肌を蔽おほうほどの

ものもなかった、肌襦袢はだしゆばんとあれだけでは、襖ふすまから透見も出来なかったことなど聞き、聞き……地蔵菩薩の白い豆府は布ばかり、渋黒い菫蕪は、ててらにして、浄玻璃じょうはりに映り、閻魔王の前に領伏ひれふしたような気がして、豆府は、ふつくり、菫蕪は、瘦やせたり。二個の亡者は、奈落へ落込んだ覚悟で居る。それも良心の苛責かしゃくゆえでありましようのに、あたりの七宝莊嚴なのは、どうも変だ、といよいよ魔法にかかって、とろとろとしたと思う。  
 ……

「御加護たまわれ。」

かかる場所にて呼び奉るを、許させらるるよう、氏神を念じて起上った私は、薄搔卷うすかいまきを取つて、引被せてひっかぶ、お冬さんを包んだのです。おさえた袖がわなわなと震えるのは、どうも踊るような自分の手で。——覚悟をすると、婦おんなは耳も白澄しろすむばかり、髪も、櫛なも、中指かざしも、しんとするほど静しずかです。

「誰だ!」

どころじやない。大きな天井に届く老婆ばばあの顔が、のしかかって、屏風越びょうぶこしに、薄髭うすひげの頤あごでのぞいている……その凄すこさというものは。

もつとも、うとうととするうちに、もそりもそり裙すそで動いたものがある。鼠、いや、猫

より大きい。しかも赤ツちやけたものが、何か動く。紅いものといつては、お冬さんはちりりともつけていなかった。第一、身づくろいをするにしては、腰を上げ手を伸ばし、余りに人品が悪過ぎる。夢か、犬かと、思ったのが薄汚れた、赤袴あかばかまです。赤袴の這身はいみで忍んで、あらかじめ、お冬さんの衣桁いこうにも掛けず嗜たしなんで置いた、帯を掴み出していたので。それを、柳に濡色な艶つやつや々と黒いのを、みしと踏ふんで、突立つたったのが、あと足で蹴退けのけると齊ひとしく、

「誰だ、何が、誰だとは人間に向うてよういうた、にい。畜生のくせにして、おのれ。」  
とその袴で、のしのしと出て坐った。黒の被布で、鈍色にぶいろの单衣ひとえの白襟で、窪んだ目を睜みひらいた。

「おお見た処が、まだ面相は人間じやに、手は、足は、指なぞどうぞに、もう犬猫の毛が生えてはせぬか。どれ、掌てのひらなど、ちよつと見せやれ。に、どれ、どれ。」

私は引ひっぱら払って手を引いた。幻に見えるのは、例の黒い瓶かめの煉薬ねりやくです。——その向つた柱には、どんな姿が、どんなありさまになっていたとお思いになります、これにかかつては堪たまらない。汚なまらわしい。

「何をするんだ。触いけなつちや不可い。」

「触つたら嬉しかる、難<sup>ありがた</sup>有いとおもいなされ、そりや犬猫に、お手々という処じやがや  
」。

「犬猫、畜生とは何だ。口が過ぎよう。——間淵の妹。」

「うん、小山弥作——何で尼の口が過ぎる。畜生、というたが悪いと思うか。くろよ、くろよ、ぶちよ、ぶちよ、うふふ、うふふ。」

と、いやらしく口を割つて、黄色い歯で笑つたあとを<sup>ひとにら</sup>一睨み睨んだ。目が光つて、

「この牝<sup>おす</sup>。」

「牝。」

余りの事に、私はむきと居直つた。

「牝、牝よ。そつちの牝<sup>めす</sup>も鬚<sup>まげ</sup>の鬚<sup>びん</sup>が、頬先に渦毛<sup>うすげ</sup>を巻いとる、見しやれ。人間の言葉が通ずるうちに、よう聞け、よう聞けや。」

牝が傘さいて、この牝を送つて出たまではよかつたれどな、帰りが遅い。その遅いだけでさえもじや、お孝がどないにも気を揉<sup>も</sup>んだいのう。起<sup>た</sup>つたり居たり、門<sup>かど</sup>へ出る、路地<sup>ろぢ</sup>を覗<sup>のぞ</sup>く。何をそわつくやら、尼も希<sup>けふ</sup>有なと思ふとるうちに、おでん屋で聞いたそな、一本松の方へ、この雨の降る中、うせたとな。

お孝が早や、あわれや、見得も外聞もない。裙すそをくるりと、あの坂を走り上った。うれしやな、ああさん、と駆けよつたのが、あの、ほの白い松の根の建札たてふだや、とにい、建札が顔に見えるようやつたら、曝さらしくび首じやが、そらほどの罪……を、また犯いたぞ。」

その松の中へ、白鷺ふくろふねぐらと梟うすが垢あせした夢は、ここではつきり覚めました。七宝よそおいの粧らでんも螺鈿らでんの衣桁いこうもたちまち消えて、紗綾さや、縮緬ちりめんも、藁わら、枯枝、古綿ふるわたや桃色の褪あせた襪はくの巢ぼろとなつたんです。

「かねてから私わしも知つとる、お孝はなお孝はな、……それがために、牝めす、われが身になつて、食くいものねだりの無理非道むりひだうよりも泣かされたぞ、に、に。牝めす、牝めすも骨身……肩、腰、胸、腹、柔やわい臆おそまで響ひびいてこたえておろうに。洞齋どうさい兄あにがや、足腰あしこしの立たん中ちゆう気の病人びやうじんがや、四年越よんねんこ、間まがな、隙すきがな、牝めすの姿すがたが立違たがうて、ちよつとの間見まみえぬでも、噛かみついて、咽のど笛ふえを圧伏おしふせるようにや、気精きせいを揉もんだは何のためや、お冬おのれが、ここな、この、木彫師ぼんぎ、直槓ちくぼう。」

私は呼吸いきを詰きめた。

「小山さんじや。まだその時は牝めす、とはいうまい。また牝めす、ともいうまい。その時には、金輪際きんりんざい、みだら、ふしだらはなかつた。また有るわけもないかじや事は、尼にも、洞齋どうさい兄あにの

身にかわつて天地を見抜いてよう知つとる。じゃが、病人は、ただそのみを、末期まで、嫉妬しつとに嫉妬して、われの貞操みさおを責め抜いたに、お冬も泣かされれば、尼かて、われの身になつて見て、いとしゆうてならなんだ。

うう、因果やの、前世の業ごうというは可恐おそろしい。曳船おそらでも、柳町やなぎでも、この直槩ちかの形が家の内へ頭あられると、棟、柱、梁はりに祟たたられた同然どうぜんに、洞齋どうさい兄は影を消すように引越して、あとをくらまかいた、二十何年もたつて、臨終りんしゅうにも、目を瞑つむらず、二世三世せまでも苦しんだ。嫉妬しつと、怨念おんねん、その業因ごういんがあればこそ、何の、中気ちゆうきやかて見事に治療ちりやうをして見せる親身の妹——尼の示現しきげんの灸きゆうも、その効かがなかつたというもんやぞ、に。」

黒い瓶、いやその信玄袋しんげんぶくろを、ひしと掴つかんで、

「に、それやもんの、あだ果報くわくぱうな、牡めは、宿業しゆくごうとして、それだけお冬に思われておつた、自おのから夫の病人びやうじんにその氣きが通とおずる、に、に。それやよつてじゃ、相合傘あひあはせで送おくつて出て、一本松いっぴんしょうにも居おらぬとすりや、雨の中あまのなかを、いつまでも、どこへどう行くもんや、つもつても知しれておる。……知れるよつてに、お孝おこうが半狂乱はんきやうらんじゃ、松の辺へには居おらぬと見て、駈かけずり歩あ行あるいて、捜たづしまわつた、脛はざの泥どろの、はねだらけで、や、お仏壇ぶつだんの前に、寝ねしなのお勤ごんぎ行ようをしておつた尼の膝ひざに抱かかきついた。これがや、はや、に、小猫こねこが身を揉もむように、

——助けて下さい、お媼おばあさん——

と、いいか、

——私は畜生になります——

とじやに。」

ただ引伏せた練絹ねりぎぬに似た、死んだようなお冬の姿が、撓しなうばかりに揺れたのであります。

「私も、わけをきいて、う、五寸の焼釘を、ここの肝へ刺されたぞ。——畜生になります

——とお孝がいうた一言じや。」

「どうしたんです。お孝さんが何をいったんだ。」

「言うか、言おうか。」

「ええ、可厭いやな息を掛けるない、何だ。」

「聞くか、聞くか。また、聞かさいで、おかりようか。おのれら二人は、いい事にして、もと友だちの、うつくしい女房、たかが待合の阿媽おかあ。やかれても、あぶられても、今は後家や、天下晴れ察度はあるまいだらじやが、神仏、天道、第一尼らが弘法様がお許しな  
いぞ。これ、牡。」

「お黙んなさいよ。」

「うんや黙らん、牡、いや、これ小山直植どの。あんたは過ぎた——何の年、何の月、何の日の、雨の降る夜よに、友だちと三人づれ、赤坂の……何の待合で……酔倒れて…………一夜あかいた……覚えがあるでしょ……でしょ……でしょ……その時の……若い芸妓げいしやを……誰やと思う。」

(拳こぶしを握つて、ハタと卓子台ちやぶだいについて、がっくり額を落したから、聞いている筆者は驚いた。)

「ああ。」

「もうその声が畜生の呻唸うめきじや、どうじや、牡、何と思う。牝、どうや。」

と、尼婆がじりじりと枕へ詰寄せる。袴の赤いのが、お冬さんの細首を裂く血に見える。「これ、夫の妹、おつかわしめの尼に対して、その形は何じやい、手をつけ、踞かがめ、起きされ、起きされ、これ。」

「はい。」

といて、前髪を枕にうつむいた。

「起きぬか。這え。これ、やつと片手をついた処は、片膝ももたげたじやろ、に。左か、

右か、毛縮緬などからめかいて、いやらしい、犬がしいこくとおなじじやぞに、に、に。」  
かツとなつた、私は子供のうちから手にする鑿のみ小刀は、今ぞ、この時のためではないか。  
畜生、いや、これは怪我にも口にすべきではない。飛びかかつて、と思つて、また悚然ぞつと  
しました。

お冬も、ぶるぶると震えたんです。

「身を震わすの、身ぶるいするの、毛並を払ふの、雨のあとのや。」

「姨おばさん、殺して……殺して……」

「何、殺せじや、あははは、贅ぜいたく沢な。これ、犬ころしにはならぬぞ、弘法様のおつかわ  
しめは。」

私はぐうたらな癖に、かツとなる、発作的短気がある。

「お冬さん、死のう。」

「……嬉しい。」

「ただし、婆ばあを打殺ぶちころして。」

「あれ、あなた、私だけ、私は覚悟をしています。」

「よい、よい、よい、よい。死ぬ、死のう。殺すとやに、そこまで覚悟がついたれば、気

を落ちつけて聞きんされ。や、や、二人とも、よう聞きんされ。これまでは罰や、罪業に對する一応の訓戒いましめじや。そこを助ける、生きながら畜生道に落ちる処を救いたまわる、現当利益りやく、罰利生りしやう、弘法様はあらたかやぞ。

おつかわしめの尼がや、示現の灸で助けてあげる。……

形ある、形ない、形ある病やみわずらい疾、形ない悪業、罪障、それを滅するこの灸の功力くりきぞに。よつて、秘法やぞに。この法は、業病難病、なみなみならぬ病ともまた違つて……大切な術ゆえに、装束をあらためて、はじめからその気で来たや。さ、どうや。お冬さん……もう牝牝はいわんぞ。お冬さん、あんたも知つてじやろ、別しての秘法は、艾もぐさも青々となる瑠璃るりの白露のようながや。」

「助けて下さいまし、お尼にさん、そうして、お灸は、どこへ。」

「魂は、胸三寸というわいの。」

「ええ。」

「鳩尾きゆうびや、乳の間あいや。」

「……恥しい。」

「年でもあるまい。二十越はたちした娘を育てたものが、何、恥しい。何、殿方に、ははは、こ

りや好いた人には娘のようじゃ。」

「夜もふけました、何事も明日にしてはいかがです。」

「滅相な、片時へんじを争う。一寸のびても三寸の毛が生えようぞに。既に、一言を聞いた時、お孝には、もう施した。二人のためには手間は取られず、行方は知れぬ。こんな場席を、仏智力、法力をもって尋ねるのは勿体ない。よって、魔魅や、魔魅の目と導きで探つて来たぞに、早う、なされんかに、お冬さん。」

「はい。」

「さ、お冬さん。」

「はい。」

「これ。」

「はい、でも。」

「ええ、うじうじして、畜生。」

「……お尼さん、助けて下さい。」

「それ、見され。」

黒い皺手しわてで、雪の胸。……

「おお、軽々と柔こう、畜生になる処を、はや、ひっくり返った。」  
 がぼと開けて、

「それ、救の手が届くと、はや、白い天人が仰向いたようじゃ。ええ、邪魔な。」  
 細い、霜を立てたように、お冬が胸に合せた両掌を、絹を裂くばかり肩ぐるみ、つかみ伸しに左右へ割いた。

「熱うない、知つての通り、熱うない、そのかわり少し大きいぞ。」  
 艾ですが、縦に二筋、数六つ。およそ一千足の子を孕んだ蜘蛛の蠢くように、それが尼の手につれて、一つ一つ、青い動悸で、足を張つて動く。……八つの乳となりはしないか、私は肩から氷をあびた。

「やの、したたかな冷汗や、胸へ走るの、流れるの、熱うはない。」  
 と吐いて、附木を持翳すと、火入の埋火を、口が燃えるように吹いて、緑青の炎をつけた、芬と、硫黄の臭がした時です。

「南無普賢大菩薩、文珠師利。……仕うる獅子も象も獣だ。灸は留めちまえ、お冬さん。畜生になろう、お互に。」

「おお、象よかる、よかる。手では短い、その、くにやくにやとした脚を片股もぎとつ

て、美婦がった鼻へくつつけされ、さぞよかる。」

「あ、あ。」

「その象結構だ、構うものか。」

「……いやです、あなたが獅子でも、象でも、私は女で、影にも添っていたいんです。」

——こんなに、いとしい思いをした覚えはない。

「よし。」

私は大胡坐おおあぐらで胸を開けた。

「尼さん、療治をうけよう。」

——火は熱いか、熱くないか、とおつしやるんですか。いや、それは……

何だといって、六つずつ十二の煙が、群むらりまとい這いまつわる、附木の硫黄は、火の車で、鉄の鍋の中に、豆腐と菘蕪がぐらぐらと煮える……申しますまい。口で言うだけでも、お冬さんを、我が手で苛いじめ虐しげたるにひと齊ひとしいんですから、ただ幻に見て、爪さきの尖さきまで、青くなつた時に、お冬さんが一言ひとこと幽かすにかいました。

「草葉の、露に、青い、螢が、見えますわ。」

と手術でもうけたあとのように、やつと立って、それでも、だてじめの上へ帯を抱えた

なりに、膝をなやして、戸を出る私の背に縋<sup>すが</sup>つて、送ろうとするのを、

「慎しみませい、灸<sup>いみ</sup>の忌<sup>い</sup>みや、男の傍<sup>そば</sup>へ寄つてもならん。」

と、袴をはだけて、立ちふさがつて突きつけた。

「そこで、戸を膝行<sup>いぎ</sup>つて出た私ですが、ふらふらと外へ出たのは一枚の開戸<sup>ひらきどぐち</sup>口で。――

これが開いたのを、さきには一本松の幹だと思つた。見ると、小さな露台があつて、瀬戸の大鉢に松が植<sup>うわ</sup>つています。一本松ではありません、何とかいう待合、同業の家<sup>うち</sup>だつた。

目の下が、軒並の棟を貫いて、この家の三階へ、切立てのように掛けた、非常口の木の階段だつたのが分りました。いずれ、客の好奇心を嗾<sup>そそ</sup>ろうといった詭<sup>あつち</sup>えと見えます。確に寺

の磴<sup>だん</sup>へ上ると思つて、いつの間にか――これで庭下駄で昇つた女に手を曳<sup>ひ</sup>かれたのでは、霧に乗つた以上でしょう。

ずり落ちる下界は、自動車が（ここへは通る）待つていました。傍<sup>かたわら</sup>に、家業がら余程奇を好んだと見えて、棕櫚<sup>しゅうろ</sup>の樹が鉢に突<sup>つ</sup>立てである、その葉が獅子の頭<sup>かしら</sup>毛<sup>け</sup>のように見えて、私は、もう一度ぐらぐらと目が眩<sup>くら</sup>んだ、横雲黒く、有<sup>あり</sup>明<sup>あけ</sup>に……

あけがた家に帰つてから、私は二月ばかり煩<sup>わづ</sup>つた。あとで、一本松、石磴<sup>いしだん</sup>の寺、その辺までは密<sup>そつ</sup>と参りました。木戸をも閉めよ、貫<sup>ぬき</sup>木<sup>ぎ</sup>をも鎖<sup>とぎ</sup>せ、掛矢<sup>かや</sup>で飛込んで逢<sup>あ</sup>いたい。心

に焼くように、雪の家の空あたりが、血走る目で火の手になり、赤いまでに見えるけれども、炎を水にし氷にしても、お孝という、赤坂で一度間違いをした娘に顔が合わされません。

畜生でも構わない、逢えさえすれば……

心を削り、魂を切つて、雌雄の——はじめは人の面のを、と思ひました。女の方は黒髪を乱した、思い切つて美しい白い相の、野郎の方は南瓜に向願巻でも構わない。が、そんな異相な木彫とすると、どこの宮堂でも引取りません。全身の獅子を刻んで、一本松——あの附近の神社へ納めたんです。

名家の馬が草を食いに、夜、抜出たのではない。牝獅子の方が、どうした事か、間もなく石磴を飛んで裂けました。」

直槓はここで目を閉じた、が、はらはらと落涙した。

「……ちようどその頃だと言います。人にはいえ、打明けては頼めない事ですから、ここいら差触りなく、おでん屋などに幅の利きそうな若い男を頼んで、あのあたりの様子を聞くと、雪の家のごしんぞは、気が狂つたろう、乳のまわり、胸に、六ところ、剃り落しても剃り落しても 赤斑の毛が生える、浅間しき、情なきに取詰めた、最後は、蚕女の

絵が抜出したように取乱して、表二階の床の掛軸「喝」という字に、みしとくいつくと、  
 松子をサツと切破いた、返す、ただ、一剃刀で。

この事があつてから、婆さんの尼は、坂東三十三番に、人だすけの灸を施し、やがては  
 高野山に上つて更に修行をすると云つて、飄然と家を出た。扮装が、男の古帽子を  
 被り、草鞋で、片手に真黒な信玄袋、片手に山伏の貝を吹いて、横町をそのまま出まし  
 た。西の方、その坂東第一番に向つた。その後沙汰はない。しかし、灸は実によく利いた。  
 人間業に似ない、と界限一帯、近く芝、となり赤坂辺まで、その行方を惜しむといいま  
 す。

——雪の家は、川崎辺へ越した、今はありません。

尼が畜生道に墮ちるのを救うといつたのも、怪しい縁によつて、私はおびき寄せたのも、  
 ……どうもはじめから、兄洞齋の、可恐い嫉妬の怨念に酬ゆる、復讐の呪詛だったと  
 も思われません。しかしまた怪しい業通によつて、かねて企図したものだつたかも知れ  
 ません。何にしても、私のために、かわいそうな、はかない、お冬……」

と、いうとともに、直槓は胸を切られたように、蒼ざめて、両手で肩を抱いたのであり  
 ました。

毛が生えていたかも知れない。血をはいていたかも知れない。その胸を、とは、さすがに筆者も聞き得なかった。

直槓がなくなつて、もう三年になる。

筆者は、あの時以来、一本松へはまだ行つて見ないで居る。恐れて毛並は見定めなかつた、坂を駆出したのは、残つた獅子だったかも知れません。

だから、家へ歸つて、少しばかり足を気にしたのも、そんなにお笑いにはなるまいと思  
う。……………

昭和十二（一九三七）年十二月

# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十四卷」岩波書店

1940（昭和15）年6月30日第1刷発行

初出：「中央公論 第五十二年第十三號」

1937（昭和12）年12月

※訂正注記に際しては、底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年9月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪柳 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>